

## 未完の物語——「絵入自由新聞」の連載記事（続き物）（二）

山田 俊 治

本稿は、前稿「未完の物語——「絵入自由新聞」の連載記事（続き物）（一）」に引き続いて、一八八四（明治一七）年の雑報欄を中心とした連載記事を一覧化したものである。これまでと同様に編集体制の変遷、他社の動向や出版状況に関わる雑報も、注記の形で\*以下に引用してある。

一月四日の附録に編年史を掲載したこの年の編集体制で特記されるのは、五月九日から二九日まで約一ヶ月発行停止となったことである。五月八日の社説は「娼妓論（第二）」で、紙面からは発行停止の要因を見出せず、言及もない。発行停止のためでもないだろうが、翌六月二〇日には「紙幅拡張記事改良社告」を掲載して、七月一日より紙面の刷新を予告することになる。その際、力士の石版肖像を附録すると予告したが、早くも他社が真似るといふ記事を六月二四日に掲載している。創刊以来の画工大蘇芳年を解雇した旨をその翌日に報じて、七月一日より五段組みの紙面に拡充して、社主兼印刷人に松田脇知朗、編輯人に小林清右衛門が署名することになった。

この改良以前に新たな自由党系の小新聞が創刊されていたことも、この紙面改良と関係があるかもしれない。その小新聞は、四月一二日に予告されて五月七日に開業式の景況が報じられた見光社の「自由燈」であった。その後の他社の動向では、六月七日に「東京絵入新聞」の前田健次郎と南新二、古川精一が退社したという内情や、「開花新聞」の画工歌川国松とともに大阪の「此花新聞」への古川の転社が報じられている。その「開花

新聞」は「改進黨新聞」と改題されて冊子型からペーパー紙になることが、七月二日の記事で予告される。さらに、七月二日の雑報は「いろは新聞」や「絵入朝野新聞」が紙面を拡張すると伝えていた。七月八日の「又しても」という雑報は、市村座の狂言に引幕を贈った見光社に絵入自由新聞が対抗したとする小新聞の記事に対して、「新聞紙は新聞紙らしく記事報道論説の堂々たる競争こそ為す」という批判を展開するのである。

「改進黨新聞」は七月二〇日に「我が立憲改進黨の主義を拡張」と広告して、八月一日から改題発行された。九月二五日には毎夕社から夕刊紙「今日新聞」が創刊され、一〇月四日には「警察新報」が「毎日の新聞奇談を網羅し識者にも婦女子にも読み易き文体を以て記載」と広告して創刊するのだった。こうした新たな小新聞の参入、特に「其日の事を其日に編輯して黄昏までに配達する新聞紙中の新聞紙」と広告した「今日新聞」の速報性は、一月一三日の雑報が報じるように「時事新報」が日曜日を除いて年中無休となり、二月二六日の雑報では「東京日日新聞」も翌年一月一日より年中無休で朝夕二度の配達となると報じられるような影響力を行使するのだった。

この「時事新報」の日曜以外の無休発行に對して、一月二二日の雑報「時事新報記者降旗を掲ぐ」で「日曜日とて社会の運動が休むと云ふ道理はあるまじ」と批判していた。その「絵入自由新聞」は休刊日に発行された一二月二九日の社告で、翌年の「政治に関係りたる西洋小説の勇壮活発なる至極面白き続物を掲載いたし」と予告して、年末年始の休刊中も「号外附録」を発行することを報じている。清仏戦争などの政治的な事件も多端で、小新聞も報道機関としての社会性が問われる時代を迎えたのである。

この間に連載された長編の続き物には、「新編嘯阿虎」全六〇回（三・二七～七・三三）、「花王樹草紙」全五五回（四・一六～七・一三）、「若枝廼初花」全三二回（七・三～八・八）、「江戸桜遊里夜嵐」全七七章（七・一三～一一五）、「縁

廻系筋」全六三回（八・一九～二一・二）、「嫉妬刃」全六六回（一一・二～一八八五・一二七）、「双調三味線」全六一回（一一・六～一八八五・二三）などがあった。この内、「新編嘯阿虎」は、九月二八日の雑報にあるように花笠文京編輯『新編嘯阿虎』（一八八四・九・三、出版御届）として、また「花王樹草紙」は、一二月二八日の雑報にあるように花笠文京編輯『花王樹草紙』（一八八四・九・三、出版御届）として、それぞれ絵入自由新聞社より刊行されている。

この他、絵入自由新聞社より出版された書籍には、デュールス・ベルネ原著、井上勤訳述、渡辺義方校正『亞非利加内地 三十五日間空中旅行』（一八八三・八・一六、版權免許）の続編、弘前見定編輯『（徵兵美談）名譽旗揚』（一八八四・三・四、御届）、花笠文京編輯『（開明小説）四季の花籠』（一八八四・四・一九、出版御届）、ゲーテ原著、井上勤訳述、渡辺義方校正『（独逸奇書）狐の裁判』（一八八四・三・一八、版權免許）、河原英吉纂訳補述『西洋奇説大日本発見録』（一八八四・五・一四、版權免許）、デュールス・ベルネ原著、井上勤訳述、渡辺義方校正『（英）太政大臣難船日記』（一八八四・五・三、版權免許）、デュールス・ベルネ原著、井上勤訳述、渡辺義方校正『（白露革命外伝）自由廼征矢』（一八八四・九・一三、版權免許）などがあり、それぞれ雜報中に広告されていた。

出版界の特記すべき話題としては、まず『経国美談』の出版を挙げられるだろう。二月二三日に後編（二八八三・一・二二、版權免許、報知新聞社）の出版が雑報で寿がれ、三月三〇日にはその原稿料で著者矢野龍溪が洋行する予定が報じられている。しかし、九月一三、一四日に連載された「稀世の操觚者」という雑報は、『経国美談』が「万巻の書籍中より引用し纂訳補綴せしには非ざるなり」として、その理由に「引用せしと云ふ書籍は何も世に稀なる西洋古代の珍書のみ」で、入手困難であるとした。ただし「右大先生の一大著述は脚色事実文章とも少も違はぬ西洋の原書ある事を発見」とするが、その原書の具体的な書名は挙げられていない。

もう一つの話題としては、金玉出版社から出版されていた桃川如燕口演、伊東専三編輯の『新説暁天星五郎』がある。六月一九日の広告欄に、山中喜太郎が著者に断りなく出版したことに對する伊東自身の抗議文が掲載されている。これは、奥付の発兌人筆頭に山中が名を連ねて、松柏社（伊沢菊太郎）を翻刻出版人とした二種類の活版草双紙（一八八四・五・二八、翻刻御届）への抗議であつた。伊東の広告は、分冊形式で金玉出版社から出されていた活版草双紙（一八八四・二・二一、三・一七、五・九、御届）が、著者に無断で他社から出版されたことへの抗議なのだった。金玉出版社版は六月一三日別製本御届で、ボール表紙本と合冊の活版草双紙を七月一日に出版するのだが、その売行きへの顧慮があつたかもしれない。

しかし、この一件は伊東の抗議では終らなかつた。版權を侵犯していない山中が伊東を告訴したのである。滑稽堂が仲裁に入り、さらには金玉出版社や春陽堂の仲介で和解となつた経緯が、七月八日の雑報からは分かるだろう。一方、七月二九日の雑報「自ら禁止」は、法木徳兵衛が出版した『檜垣山名誉碑』（一八八四・一・四、御届）を、旧藩主の抗議にもかかわらず「其向より厳達」として絶版広告をした事情を暴き、出版業者の事大主義を諷していた。また、七月一九日の雑報「是も不景氣故か」は、不況下での狡猾な草双紙版元の商売を暴いていたが、こうした版元主導の出版に対して著者の權利を主張した事態として、伊東の広告は注目されるであろう。

一八八四（明治一七）年

1月4日付録（編年史）「明治元年（略）新聞紙 此時より胚胎す 史に曰新聞紙の我国に始りしは文久三年横浜に於て本間某出版者となり岸田吟香編輯人となり發行せしを以て嚆矢とす尋て同港居留の外人万国新聞を

刊行す明治元年京都に太政官日誌江戸に中外新聞の刊行あり／米人藻塩草を横浜に発行す時正に維新の革命戦に際し十余種の新聞踵<sup>ついで</sup>で相起り記する所皆戦報に係る江湖新聞の論説官軍の意に触れ記者為に軍務官に拘致せられ此時新聞紙の類悉皆発行を禁止せらる翌年更に新聞発行の許可あり始めて新聞条例を定らる当時新聞の功益を知者少く僅々一二に過ぎりしが同五年に至て英人貌刺屈が日新真事誌なる大新聞の世に出しより東京日々新聞郵便報知新聞等尋て起る新聞紙稍其勢力を得んとす因て政府は六年を以て更に条例を定むと雖も未だ罰せられたる者なく殆ど自由発論の域に至らんとするに際し激論以て政府を誹議し摘発以て人の榮譽を害するなきに非ず因て八年を以て又讒謗律新聞条例を施行し其法網に触る者は禁獄に処し罰金を科す。文久以来各港に於て洋文新聞の発行あり英文の「ジャパンデーリーヘラルド」「ジャパン」「ガゼット」「トウキヤウ、タイムス」及仏文「レコ、ジュ、ジャポン」等皆外人の手に成る日新真事誌は頗る世人の信用を得ん□□記者貌刺屈の左院に聘せらるゝに及で停刊し□□の後改正条例の施行あれども外人の日本法律に従ふべき責務なきを頼み明治九年の初万国新聞を発兌す政府断然之を禁止す貌刺屈は禁止を受ける理由なきを英国領事に訴ふ政府も亦同国公使に照会<sup>かけあ</sup>ひ日本の条例を遵奉せざる者にして日本人の新聞を刊行するの妨害あるを談じたるに同国公使も其旨を領し日本在留の英民に布告して日本人の新聞紙を発行するを禁止したり○改正条例の出るや論者は大に激動し之を嚴密なりとし之を圧制なりとし罰則に触る者陸統として絶ず世人も亦法網に触るを憐み記者自之を榮とし故意に激説暴論を試むるに至る因て政府は九年を以て新聞紙の国安を妨害すると認めらるゝ者は内務省に於て之を禁停するを令し評論新聞草莽雜誌等の発行を禁止す斯く法律の完全なるにも拘らず新聞紙は社会に對して次第<sup>しだ</sup>に勢力を得四五年以来政党の勃興するに当り各其党の発論機関となり大に進歩を來したり然に昨十六年一月一日より新刑法実施就て同年四月十六日新聞条例を改正され一層締向の精密に涉り我々記者の注意を切

ならしむるに至りたる也此から先は如何なるか又来年の新聞歴史に載べし」

\* 1月6日 「雑報」「自由新聞改良 同新聞にては本年より更に一層の改良を加へられ古澤小室曾田三氏の外に星亨杉田定一大井憲太郎高橋基一植木枝盛の五氏を聘し各々社務に任じ論説翻譯等益々奮勵せらるゝ由なれば定めて盛大に趣くならん」

「出版 松村操先生の著述「女侠全伝科戸風」巻の一を日本橋通三丁目の開成堂より発兌す此書は紀元千四百年代仏蘭西の烈女ジャンダークが義兵を挙て英兵と戦ひ国王チャアルス七世を救ひたる勇壮活潑の正史を翻譯されたるものにして艶麗に綴りたる上密画をも加へ印刷製本共に頗る美なり又我絵入自由出版社より「空中旅行」巻の三及開明新説聖代の球謡（前後二冊）五月雨日記（全一冊）を出版せり就空中旅行は旅客おひくゝ亞非利加内地の佳境に入り看客をして思はず快と呼び奇と称せしむ実に世界無比學術実験上の一大奇書なりまた四十八手角力古実櫓太鼓前後二冊は薬研堀の三友社より花廬春時相政二編小狐礼三情掛罌全一冊は滑稽堂よりいづれも此程出版になりたり」

1月8、9日 「一個人と社会との関係」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 1月9日 「雑報」「出版 稗史出版会社より和莊兵衛の前編を出版せられたり」

1月10、11日 「到底何する」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 1月10日 「雑報」「東洋義人百家伝 小室信介氏の著に係る東洋民権百家伝は此程題号の通り改称され本月下旬には弥々其の二篇を発兌せらるゝ由」

1月11、12日 「恋の闇」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

1月12、17日 「政治の道行」全五回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。12日冒頭に「左の一篇は嘗

て社友夢柳氏の考案に基き余輩が補述せしものなり然るに久しく筐中に蔵め置きしを廻間或人に示せしに篇中或は滑稽を交める所ありと雖も主ら事實に適せしを以て見るべきものあるが故に空しく蠹魚に属せしむる勿れとの教に従ひ猶ほ訂正を加へて本欄内へ掲載する事とはなりぬ 半狂瘦士 識」と付言される。

1月12、15日 「続長恨歌」全三回 \* 雑報欄にかぶせ見出し、挿絵つきで連載。

\* 1月13日 「雑報」 「記者曰す 本日は面白き雑報種へ挿画を加へましたれば続話は二箇とも次号までお預りと致升」

\* 1月15日 「雑報」 「おでゝこ 下谷深川を始め其辺にては外面のみ道化手躍など、称し内実は歌舞伎狂言座にて演ずる従来出来りの狂言を其儘興行するおでゝこ劇場の其処にも此処にも起りて夫がため免許を得たる真正の劇場座へ多少の影響を及ぼし迷惑にも又不都合なれば右等の紛らはしき興行は一切差留に相成る様劇場取締中村明石他十名より昨日其筋へ願ひ出たる由如何様斯る苦情もある可し」

1月18、19日 「両立すべき者と両立すべからざる者とを論ず 神田 青山茂」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 1月18日 「雑報」 「東京大学 同校退学生を復校せしめらるゝ趣きは前号の紙上にも記載せしが其筋にても種々御評議の末弥々再入学を許す事に決し去る十五六両日に於てまづ右事件に関係薄き奥田義人氏外五十余名丈に再入学を許され仮に原級に復し修業すべき旨を達せられしが其他も追々再入学を許さるゝ筈なりと云ふ」

1月20、22日 「自由大明神の祠を建て大ひに此宗門を周布するの議 在足利 白骨居士寄稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。



1月20日～2月13日 「お鈴の履歴」全一六回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。1月18日雑報の続報。

1月23、24日 「小児の権理 三田 栖山樵夫」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

1月25、26日 「地方の空氣」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

1月25、27日 「悪党」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

1月25日～2月5日 「両毛紀行 和田稻積」全八回 \* 雑報欄外に別行見出しで連載。

1月27、31日 「節妓」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

1月29日～2月3日 「新年祝す可き歟 在三河西尾 鈴樹干城生稿」全五回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見

出しで連載。

1月31日、2月1日 「積善の家有余慶」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。2月1日は「菊松兄妹の話」と題される。

1月31日～2月7日 「囚人の美事」全六回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。31日は挿絵つき。

1月31日、2月2日 「繫がぬ意の駒」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。2月2日末尾に「次号までお預り」とある

が、続稿は確認できない。

2月1～3日 「痴情の果」 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

\* 2月1日 「雑報」 「出版 夙に江湖の喝采を博し予て諸君の待詫たまふ（亞非利加内地三十五日間空中旅行）

第四編は昨日絵入自由出版社より出版せり五編六編とも引続き出版本月中にも全部出版の筈なり」

\* 2月2日 「雑報」 「風説 新聞条例を改正さるゝやの風説は嘗て記せしが此ほど聞ところ因ば新聞紙等の

支配をさるゝ何某君は元來新聞記者が罰せらるゝは讒謗律に抵触するを多しとす凡そ記者が其事の實の有を

紙上に記載するに当り假令誹毀に涉るも懲戒の意より出しものなれば左のみ咎るに足されど法律中事實の



有無を問はず云々の箇条あるより誹毀を被りたる者は己が悪事醜行を蔽はんが為め之を告発して記者を罰せしめ尚ほ其悪事醜行を改めず還つて得意揚々たる者往々あり箇条な憎むべき行為は誣告の刑に処して然るへし左すれば夫の事実の有無を問はず丈の文字を削除少しく宥恕したらんには世人も大に素行を警め記者も其実跡を探索して記し文筆を曖昧の中に舞す等の弊あるまじければ此議を其筋へ建白せんと主張し居るゝ由」

\*2月3日 「雑報」 「大英今代史 同書は曩日に板垣退助君が欧州より提携せられたる書籍の一部にて英国今代ヴェクトリア女皇の即位より一昨年に至る四十年間英国に現出したる政治、文学、工芸、技術、農商、外国交際、貿易、宗教、政党の盛衰、外国戦争法律政度の改革、鉄道、電信、博覧会其他政党首領の履歴并に政略等に至る迄細大漏らさず記載せしものなるが今度曾田愛三郎氏が訳述せられ其一卷を日本出版会社より発兌になりたり」

2月6～8日 「改正徴兵令を読んで感あり併せて文武両道を論ず 桃園居士稿」 全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

2月9～12日 「雪解の感」 全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

2月10～15日 「実弟殺害」 全五回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

2月14、15日 「情死」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

2月15、16日 「マダム、ローランド君の伝を読む」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*2月15日 「雑報」 「遊錢窟 今度いろは新聞社内遊錢窟にて序文報条等の作文印刷共取次引受ける商売を始められたり其序文報条に操觚者は同社の魯文。若菜。開花の柳香。南翠。自由の小室及び三代目風来（前

名岡丈紀）の諸先生并に弊社の文京も雑魚の魚交り誰に書せやうと依頼人のお好みしだい沢山御注文を願ひ升と仲間だけに余計な提灯」

「提灯持 八大家文講義卷の六を芝区通新町田原徹氏より又梅亭金鷲翁が編まれたる妙竹林話七編人と云ふ一読臆で茶を沸す素伽羅果然として木香くたる滑稽無比の珍書を神田五軒町の小笠原書房より又た三十五日間空中旅行巻の五（詳しくは本日 of 広告を御覧あれ）を弊社内出版社より出版又た鳴鶴仙史行書千文の習字本一冊を横山町一丁目の稲垣武八方より出版せり」

\*2月17日 「雑報」 「提灯持 妙竹林話七編人と云ふ西洋綴の美本は日本橋区檜物町の加藤正七（前号神田五軒町の小笠原書房よりと記せしは誤りなれば茲に提灯の持直し）方より娼妓と客討論筆記は通り三丁目の秩山堂より圭玷新評の第一集は団々社より現今有名一覽と云ふ一枚摺の物は小川町の秩山堂よりまた日清諸名家の詩文書画集にて鳳文会詩と題する一小冊を南鍋町の鳳文館より発兌されました」

2月20、21日 「太陽は只光が能に非ず」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*2月21日 「雑報」 「提灯持 新編水滸画伝初篇二冊（曲亭馬琴訳述）二篇二冊（高井蘭山訳述）挿画は弊社の芳年にて校合もよく届きたる善本を元大坂町の法木徳兵衛方より（略）」

2月22、23日 「負債者の言訳 白骨居士」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*2月23日 「雑報」 「経国美談 予て世人が翹足して待ち居たる経国美談（矢野文雄氏著）の後編は今度愈よ発兌になれり此編には壮年有為経国の名士が縦横列国の間に立て大業を企つるの一段円を得意の快筆を以て編述されたるものにして且前編同様栗本、依田、藤田三氏の高評を付し挿画も一層精密を加へ極美麗き石版画なれば完全無比の良書なり」

「著者の所得 我国の弊風にて戯作小説と云へば其奥蘊も探知ずして糞の如く見做し適ま之を閱する者あるも之を目して放蕩無頼俱に交るべからすとする輩多けれど流石西洋諸国は左にあらざ随つて著者筆勞の報酬も多きが中に彼の英国に有名なる小説家ウラルター、スコット氏はテールズ、ヲフ、マイランドロルドと云ふ著名<sup>な</sup>き戯作九巻を著述し十五万円を領収したりと其他一円に付五万四万円位を得る者は間ある由し其の盛なるや思ふべく其の能や羨むべし」

2月24、26日 「子殺し」 \* 雑報欄にかぶせ見出し、挿絵つき。

2月26、27日 「民主政体論 樞山樵夫稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 2月28日 「雑報」 「提灯持 三国志の内蜀の玄德が関羽、張飛の両豪傑を従へ風雪中諸葛孔明の草庵を訪ふ 図を弊社の芳年が腕を揮つて挿<sup>さ</sup>きたる極美麗き錦絵は本石町の武蔵屋より神經闇開化怪談の二篇は南茅場町の鈴木八次郎方より唐本八大家文講義卷の七は京橋区弥左衛門町の相生社より春秋左氏伝講義の十九回は寛裕社より孰れも発売せられたり」

2月29日～3月4日 「政治家の要すべき羅針盤は何ぞ 在三河 鈴樹干城生稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

2月29日、3月1日 「娼妓の落人」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

3月5、6日 「専制権の使用」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 3月5日 「雑報」 「三十五日間空中旅行 予て諸君の御高評に預りたる同書の第六編を絵入自由出版社より発兌したり該篇は氣球浮揚力を失ひ到底三人の空中旅行者を空中に保つ能はず大湖の上に墮落せんとするに当り三人の中なる一人の義人見目も霞む数千尺の高点に在る氣球より下界に飛下り二人の朋を救ひ自己

も九死を出て一生を得る巻中一大眼目の佳境に入たれば巻を掩ふを忘れしむ実に奇々絶々妙不思議の珍書なることは読得て其言の偽りならざるを知り玉へ且七編も引続き出版程なく満尾に至る上は奇麗なる合本に製て挿画其他も改良して売出升れば此上御愛読の程を願ひ升」

3月7、8日 「虎心而勿為羊形 茨城県 藤田生稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

3月8、9日 「鈴木貫一公判」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。9日は「鈴木貫一公訴状」と題され、「以下次号」とあるが続稿を確認できない。

\* 3月8日 「雑報」 「提灯持 新富座春狂言実評判記は琴平町の清光堂より又「実説名画血達磨」二冊は芳譚雑誌愛善社より出版何も時好に通したる面白き物なり」

3月9、11日 「内地雑居論をなす者を論ず」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 3月8日 「雑報」 「世界周遊旅日記 今度京橋区竹川町の九春社より発兌になつた世界周遊旅日記一名釈迦牟尼仏墳墓の由来と題する西洋綴の一小冊は曩に印度に渡りて釈迦墳墓の地を実見して此程帰朝せられたる彼の北畠道龍師が旅中の日記加ふるに印度の地理人情及び風俗等を詳細に記したる良書なれば御望の方発兌の書林に就て購求たまへ」

3月12、13日 「一盛一衰」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

3月12日 「牛馬の葛藤」 \* 雑報欄にかぶせ見出し、「次号に又」とあるが続稿を確認できない。

3月13日 「野本三作」 \* 雑報欄にかぶせ見出し、「次号に譲る」とあるが続稿を確認できない。

3月13、16日 「再会奇聞」全四回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

3月14、19日 「平民論」全五回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

3月14、15日 「鈴木貫一公判」 \*雑報欄にかぶせ見出し。

\*3月14日 「雑報」 「大憤発 曩に京橋竹川町の九春社より発兌になった世界周遊日記一名釈迦墳墓の由来と題する一小冊は或る一書生より草稿を買受たる者なれば打聴とは云へ往々実際に齟齬する廉もありて不都合も亦尠なからねば右の冊子は悉く抹殺し更に北畠道龍氏に就て其実際の原本を申受け改ためて近々出版せんと昨今専ら印刷に着手中とは此杜撰な世の中には又と有がたき大憤発にこそ」

「三十五日間空中旅行 近來の一大奇書と夙に江湖の喝采を得たる亞非利加内地三十五日間空中旅行の第七編を絵入自由出版社より発兌したり該篇にて七冊満尾したれば読者も定て満足なるべし」

3月14、15日 「東京府会傍聴筆記」 \*雑報欄にかぶせ見出し。14日は付録に掲載。

3月15、26日 「雪の曙」 全九回 \*雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。

\*3月15日 編輯人 土居恭馬となる。

\*3月16日 「雑報」 「蛭雪美談 弊社の花笠文京作大蘇芳年挿画の才子佳人蛭雪美談と云る絵入美本（一冊読切）を例の福字堂より発兌したり又各国演劇史全一冊は大伝馬町の田中和助方より又伊東橋塘子の編輯曉天星五郎の二編は例の金玉出版社より何も此程出版」

3月19、21日 「東京府会」 \*雑報欄にかぶせ見出し。

\*3月19日 「雑報」 「新書出版 増尾種時氏編纂の日本議會現法と云ふ日本現行の法規を遺漏なく輯録したる必要の書と法学協會雜誌の第一号は八官町の忠愛社より男女情愛論全一冊は愛宕下町の六石館より又た輪因果遺恨傳と云ふ一冊読切の絵入美本は芝琴平町の本阿弥方より孰れも出版」

3月21日、4月1日 「芸妓論」 全一〇回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。21日冒頭に「左の一篇

は吾友自由万歳生の起草にかゝるものにして或は余輩と其の感を同ふせざるものあるを免れずと雖も聊か立論思想の奇妙なるが故に茲に採録して以つて江湖の一瞥を博す／編者 愛梅識」と付言される。

\* 3月26日 「雑報」 「出版 当時評判高き伊東橋塘氏編述の新設暁天星五郎の第四篇を金玉出版社よりまた婦人衛生論付育児要訣と云ふ婦人衛生に關する良書西洋綴美本全一冊を丸善商社より何れも此程出版」

3月27日～7月3日 「新編嘯阿虎」全六〇回 \* 雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。4月22日は第廿一章上下を他の記事を跨いで掲載。

\* 3月29日 「雑報」 「提灯持 檜垣山名譽碑文と云ふ上下二冊の絵入美本は日本橋区元大坂町の法木方より日本酒釀造法全一冊は浜町二丁目の榮成舎より新編暁天星五郎の第五編は例の金玉出版社より孰れも発売」

\* 3月30日 「雑報」 「経国美談の効能 文士一握の筆まことに輕視すべからず報知社の矢野文雄先生は予てより英国の憲法及び政党の運動組織等取調の爲め欧州行の志を抱き居られしが其時機を得られざりしに去年聊か思ふ所ありて経国美談を著せられしに意外世に行はれ已に三版を刷行する程に至りしかば之を洋行の資金に充てんと思ひ立たれ又其ために昨秋以来引籠りて後篇の述作ありしに是も亦世人の知る如く大に江湖に愛読せられ心算通り前後数千金を得られたれば是を資本とし尚ほ報知社よりも幾分か不足をば補助し来月中旬には英国に向つて出発せられ帰途は米國を巡遊せらるゝことに決せられし由右に付き先生が其近作を親友に示されしと聞く日月勿々去似流、縦横費計二春秋、屏居半歳君休怪、万里售文試遠遊と一部の著書を以て英米の巡遊を企つるは実に先生を始めとすと昨日の朝野新聞に見へしが実に大した御憤発」

4月2～8日 「芸妓余論」全五齣 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

4月6、9日 「白浪お政」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

4月9～11日 「政府職務の限界を論ず 檀山樵夫」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 4月12日 「雑報」 「守田勘弥 世の流行は不思議な物にて維新以来劇場社会に守田勘弥と云る一個の才物現出し速くも時機を察して旧来の弊風を稍や洗除し何やら斯やら演劇の面目を一変せしより貴顕紳士は云も更なり各国公使も参観し新富座の名は海外に迄轟く程に至りしも此程は其名声を角士社会に占られて彼方にも亦た世に聞えし高砂浦五郎となん呼る利口者ありて之が周旋宜しき為か遂には天覧の栄を辱けなふする程の場合に至り栄枯忽ち地を換て角力は日にく隆盛に赴き芝居は漸く衰退なすより斯ては永続覓束なしと守田勘弥は頭痛鉢巻伝手を求めて或る貴顕の門を敲きて只管に貴顕方の遊覧を乞ひ甲首乙首へ音物を贈り東西南北に奔走して種々尽力せしものゝ何分思はしからぬより今度は忽まち趣向を変へ今度新富座にて興行する『満二十年息子鑑』と云ふ狂言に徴兵を忌避つた者は落零れ奮つて兵役に出たる者は立派に出世する等の事実を面白く綴り成し之を演劇にもので所謂の無学の早学問に供し之を種として権門貴族の喝采を博せんととの結構なるよし何しろ守田と高砂は劇場と角力の両大関」

「提灯持 芝区浜松町二丁目岩城勝蔵方より三村芳南氏が編述されたる雲霧阿辰青木廻々栄と云ふ一冊読切の絵入美本を出版したり」

「絵入自由燈 旧と自由新聞の編輯人たりし武藤金吾氏は今度京橋区鎗屋町へ見光社と云を設け絵入自由燈と題する一枚摺の新聞を発行さるゝ由」

\* 4月13日 「雑報」 「大坂の劇場 同所の劇場にて今度市川右団次が彼の有名なる俠客会津の小鉄の事跡を一日通し狂言に脚色近々の内に開場するさうです」

4月15～17日 「角觥と演戯」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。



\* 4月16日 「雑報」 「世界無双の富国」と云は北亞米利加合衆国たることは世の人の偏く知る所なるが傾日発兌の外国新聞に記載するを見るに同国の鉄道、船舶、土地、生活の資本、元入資本、家屋、什具等一切の国財を合計すれば凡そ五百億弗の価値あり之を人口に割賦する時は一人頭平均一千弗位に当るなりと爾ば米人の富国に誇るも道理至極と言ざるを得ず」

「弱い稼業 当時売出の評判俳優市川権十郎は誰も予て知る如く嵐璃鶴と云し頃毒婦お絹の連累にて法律上の罪人となり去明治九年中永年の懲役に処刑され満期放免となりし以来同監に在て懇意にしたる他の囚徒等が漸次満期にて放免となる時は何れも同人の宅へ尋ね来り親方御無事でお目出たいとか放免後は却て御繁盛懲役場の苦役も宜い修行になりやしたらう杯と訝な台詞を吹掛て三円五円乃至十円以上の無心を言込み謝絶する時は何の彼のと悪口雑言を吐散すので顔を売る弱い稼業に負け平生の吝嗇舗を押ツ開き乞ふに任せて不得止与へし金も年月と共に塵積りて山となり此程勘定して見ると千五百余円の巨額に上りしと云ふが昨今は最早同檻したる囚徒の概略放免になつたと見え尋ね来る者なくなりしかば同人は胸撫下し漸やく安堵したりと云ふ」

「提灯持 星月夜鎌倉頭晦録を西洋綴二冊活版刷の美本に仕立て例の鶴声社より発兌になりたり」

4月16〜7月13日 「花王樹草紙」全五五回 \* 雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。

4月17〜20日 「情死」全三回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

\* 4月18日 「雑報」 「通人必携 弊社の花笠文京が利た風流の著述に係る「歌舞伎音曲芸娼妓事情通人必携と云る小粋な書籍（全一冊）を湯嶋切通の福字堂より出版絵入自由出版社にて大売捌を致し升れば沢山お購求を願ひます一度読ば通人となり女に惚られること保証なり」

4月19、22日 「蒼蠅世の中 白骨居士稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 4月19日 「雑報」 「福地源一郎殿 官権家の巨擘新聞日報社の社長福地源一郎殿には下谷池の端のお住居から東台の花を一眼に眺むる好風景を好下物とし一昨日伊藤井上の両参議様を始とし日来厚き保護に預かる貴顕の方々を招待され観花の宴会を開かれ夜に入ては燿きまで銀燭を照しての娛愉快取巻には府下一等の芸人のみを集め団十郎伯田円朝播磨太夫延寿太夫お葉中の島検査等にて弦歌宛ら湧が如く頗る御盛大なりしとは有繋官権家は官権家だけ」

4月20、23日 「大を望む者は宜しく小を図れ」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 4月22日 「雑報」 「新説暁天星五郎 桃川如燕が得意の読物義賊暁天星五郎の実伝を伊東橋塘子が艶筆に綴られ飯田町の金玉出版社より発売されし処意外に評判好く大層売る由なり右は二十編大尾にて既に本日其第十編を出版せり実に面白い読書です」

「大蘇芳年 一昨日のいろは新聞に今般発売の絵入自由燈の挿画を弊社の芳年が画くと記しありたれど右は誰人かの誤聞なるべく芳年は弊社の挿画のみ他社の新聞画は描ません」

\* 4月23日 「雑報」 「枯野の田鶴 弊社の花笠文京が操觚に係り当紙上に於て御評判を得たる枯野の田鶴を極面白く綴りかへ一冊読切の美本に仕立て絵入自由出版社より発売しましたから諸君続々お購め下さい」

\* 4月24日 「雑報」 「徴兵美談名譽旗揚」と題する冊子を絵入自由出版社より出版此書は今度新富座で演る「満二十年子息鑑」と云二番目狂言の種本にて其实録を綴しものゆゑ之を讀で演劇を観ば能く解る面白き書冊なり又同社より出版の「三十五日間空中旅行」全七冊は此程美麗の合本出来学術上有用の西洋小説也」  
4月25、27日 「習慣の弊」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 4月25日 「雑報」 「自由燈 予て記したる絵入自由燈はいよく来月十一日より其の第一号を発刊し後五日間を隔て続々発刊さるゝ由なり」

\* 4月26日 「雑報」 「提灯持 蝶鳥筑波裾模様と云ふ全三冊入り一帙の絵入美本を例の愛善社より出版されたり」

\* 4月27日 「雑報」 「福地源一郎殿 浅草公園地は予て区域を定められたる通り（前号の紙上に委し）来る七月三十日限り観音堂の周囲二十間以内の建物を悉皆取払ひになる由にて観世物及び掛茶屋等は頭痛鉢巻且つ同公園地の取締役は今度官権新聞の大親分日報社の福地源一郎殿へ命ぜられ年俸五百円を賜はり尚ほ余徳として来る明治十八年一月より同公園地内の糞小便一切を賜はる由堂々たる大新聞の記者殿が公園地の差配人兼勤とは珍しい」

4月27、29日 「時ならぬ紅葉」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。27日は挿絵つき。

4月29～5月4日 「強盜高橋庄蔵の履歴」 全四回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。5月4日末尾に「次号を讀て知たまへ」とあるが続報は確認できない。

4月30～5月4日 「第二回絵画共進会」 全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 5月5日 「雑報」 「福地源一郎殿様 には浅草公園地取締兼差配人を拝命遊ばされし由は前日の紙上に掲げしが右に付き其の仮事務所を植木屋六三郎の庭内へ設けられ昨日は其のお係福地条野松本山田の方々同公園地内を巡視され是迄の中見世を二等煉瓦となし夫々規則を設けて火事の用心をせらるゝと云ふ然るに同所の借地人等是一同寄り会ひを付け府庁へ向つて何か嘆願するとして頻りに相談中なりとは有難迷惑の筋でもあるか知らん」

5月3、4日 「根津の血の雨」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。4日は挿絵つき。

\* 5月4日 「雑報」 「発売禁止 日本橋区馬喰町二丁目廿五番地に寄留する茨城県平民飯嶋半出板の明治十七年方位吉凶明覧と題する書は略ぼ本曆に類似きを以つて其の筋より出版発売を差止られたり」

5月4、6日 「二世を契る」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

5月6、7日 「一盛一衰」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。6日は挿絵つき。

\* 5月6日 「雑報」 「西洋膝栗毛 仮名垣魯文翁著の西洋膝栗毛を今度芝浜松町の岩城勝蔵が翻刻し更に一松斎芳宗の挿画を加へて同家より発売になりました」

5月7、8日 「娼妓論」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 5月7日 「雑報」 「発売禁止 京橋区南鍋町一丁目七番地の望月誠方寄留長野県士族根村熊五郎編輯の人身造化機論は詮議の次第之れ有るよしにて一昨日其筋より発売禁止を命ぜられたり」

「自由燈見光新聞社開業式 今回京橋区鎗屋町十四番地の見光新聞社より発刊さるゝ自由の燈は来る十一日を以て其開業式を挙行さるゝよしにて当日は警視總監、駅通総官、東京府知事、警保局長図書局長、文書局長、電信局長、警察署長、等より府会議長、京橋区長、区会議長、等は申すに及ばず京浜の諸会社、各銀行、病院、新聞、雑誌社、代言人、其の他朝野の紳士数百名を招待せらるゝよしにて同日午後第二時各賓客は鎗屋町なる本社へ来会され祝詞演説等を了りし後一同設けの人力車にて築地の寿美屋へ着其処にて盛なる酒宴を張られ同時に日本鉄道会社の付属地字海軍の原にて火花を打ち始しむ此の火花の第一は同社の旗章を仕掛しものにて其れより満天白、黄烟柳、雷後の月、都鳥、雨足雷、紫星、千条ヶ滝、等昼夜数十発いづれも自由燈と染め抜きたる絹手拭と木綿手拭（其の数一万五千筋なり）の開くに随ひ空中より四方へ散らし其

の絹手拭を拾ひ得し人々へは同新聞を一ヶ月無代価にて進呈すると云へり又た同日此の余に自由の燈を点じたる辻占入の花簪二万本玩具数千個を日本橋両国上野広小路等繁華輻輳の土地にて通りかゝりの婦幼へ給与せらるゝとのことにて実に輦下にて新聞紙の創まりし以来の開業式なり」

「浅草公園地 此程浅草公園地の世話掛を日報社の隊長福地源一郎殿が拝命されたる事は追々前号にも記せしが右に付き同公園地拝借人一同は殊の外不平を鳴し是非とも源一郎様に自身出張の上事務を扱かつてもらいたく手代のみを用ゐられては靴を隔だて痒きを搔くの思ひあり依て福地殿様の手代松本、山田、条野の三氏を廃し公園借地人一般の公撰を以て更に適當の手代を置き旨昨日其筋へ出願せり又同公園地の建物取払ひ一件は兼て七月三十日限の処ろ右にては殊の外難渋ゆゑ尚ほ来年十二月三十一日まで日延相成たき旨浅草神社の氏子中一同より本日出願すると云ふ何にしる公園地は中々の混雑なる由」

5月7、8日「稀代の悪党」 \*雑報欄にかぶせ見出し。8日末尾に「以下次号」とあるが、発行禁止のため、続稿を確認できない。

5月8日「遊君右京」 \*雑報欄にかぶせ見出し。「（一）」とあるが、発行禁止のため、続稿を確認できない。

\*5月9～29日まで発行禁止処分となる。5月9日付の「社告／昨八日午後七時弊社主松田脇知朗に即刻出頭可致旨警視庁より御召喚相成候に付代理として社員出頭候処左の如き御厳達を蒙りたり／絵入新聞社々主／松田脇知朗／其社絵入自由新聞明九日より発行停止候旨其筋より被達候条此旨相達候事／明治十七年五月八日 警視總監大迫貞清／右の通り御厳達を蒙り社員一同恐縮謹んで停刊罷在候尚解停の恩命を蒙り候上は引続き発行可仕候間旧に倍して御愛看の程偏に奉願上候以上／明治十七年五月九日 絵入自由新聞社／社員一同謹白」とするピラを発行する。

\*5月30日 「雑報」冒頭 「当新聞発行停止以来三週間の長きを経過しやうやう昨日解停の恩命を蒙り候次第ゆゑ其間の記事机上に山をなしぬ依て当分の中は旧聞に属し候事と雖も緊要の件に限り遅れながらも記載致しますれば此段御承知を願ひ上ます」とある。

5月30日～6月1日 「不測の縁故」全三回 \*雑報欄にかぶせ見出しで連載。30、31日は挿絵つき。6月1日は付録に掲載。

5月30日付録 「海底の財宝」 \*雑報欄にかぶせ見出し、挿絵つきで他の記事を跨いで掲載。

5月31日、6月1日 「自主の人間」 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*5月31日 「雑報」 「発売差止 各府県下にて出版したる本年の略暦は三十四種もありて各々発売し来りしが何れも本暦類似の者なれば今度其発売を差止られたり」

5月31日、6月1日 「黙闇解き」 \*雑報欄にかぶせ見出し、6月1日は付録に掲載。

5月31日 「白刃芸妓に迫る」 \*雑報欄にかぶせ見出し、末尾は「次号に載ます」とあるが、続稿を確認できない。

\*6月1日 「雑報」 「出版 飯田町の金玉社から月に六編つゝ出版してゐた新説暁天星五郎は十六編以下廿三編の結局までの草稿を其筋にて検査中に付き一二回延引したれど最早御下附に成たため一昨日直に十六編を出しあとは引続て出版するといふ」

6月3～7日 「財産家諸君に御相談 愛梅稿」全五回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

6月4、5日 「花風病歟」 \*雑報欄にかぶせ見出し。

\*6月5日 「雑報」 「出版 今度神田小川町の東洋館書店より発売になりし該撒寄談自由太刀余波銃鋒と題する小説は文学士坪内雄蔵氏の翻訳にして院本体に書き綴りたる画入りの頗むる面白き美本なり」

「函右日報 静岡の同新聞は本月一日より紙幅を拡め論説雑報等の記事を改良し活字印刷も至極鮮明なる上雑報中の続き物は東京の或人より郵送を為ゆゑ如何しても地方の新聞とは見えず東京恥かしき程に能体裁」  
「発行停止 団々珍聞は一昨日発行を停止さる」

\*6月6日 「雑報」 「大入 神田の白梅亭が此一日よりの夜席は玉輔柳橋、宮子、此勝、如燕等にて玉輔はテールに掛り西洋小説を話し真打の如燕は暁天星五郎の伝記にて入口へは景氣行灯を二つ灯し飯田町の金玉社から出版する星五郎の書を毎晩十五冊宛景物に出すので見物は未だ明い中から詰掛客留をする程の大入ですが出方が一粒撰で景物が取れば大入大繁盛は道理く」

\*6月7日 「雑報」 「内幕 此頃は新聞社内幕の紛紜が流行物（と言解<sup>いふわけ</sup>でも有まいが）御都合に依ては時々の変遷も当然にて東京絵入新聞にて数年の勤功ありし前田健次郎（夏繁）どのは先頃より病氣とやらで長らく退てゐられたるが今度弥々退社され続いて編輯の誰要助（南新二）どの古川精一（魁<sup>くゐ</sup>雷子）どのも退社されあとは染崎延房（為永春水）翁のみ従事してゐらるゝに付き素明治日報、いろは、絵入朝野などの新聞に従事されし野崎城雄（左文）どのが絵入へ入社されるとかされたとか言話し又古川精一どのと開花新聞の画工歌川国松の二人は大坂の此花新聞の招聘に応じ近々此地を出立して該新聞社へ入社さるゝといふ」

6月7、11日 「新平民の幸不幸 日本子」 \*投書欄に別行見出し。

6月8、11日 「名譽とは何んぞ」 全三回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\*6月10日 「雑報」 「写真の仇討 目下開化落語にて有名なる五明楼玉輔が人情話の中にて何処の席にて演ても大入を取る写真の仇討といふは近世の一奇事にて写真の為に親の敵<sup>マユ</sup>の知るといふ名談なるが是も目下新著の美本を出版して有名なる室町の滑稽堂より右の話を前後二冊の読本となし（伊藤専三編輯、大蘇芳年画）



本日発兌になりましたが袋は写真挟みの体裁を模し表紙は人物の写真に倣ひ口画の艶麗なる挿画の緻密なる実に近頃無類の美本に出来し当社中自由出版社にても大売捌を致しますから猶委敷は今日の広告にて御覧の上お求を願ひ上ます」

6月10～13日 「新富座略評」全四回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

6月10、11日 「芸妓と華族」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

\* 6月11日 「雑報」 「女学新誌」今般小学雑誌本局修正社より発行さるゝ該誌は文学、礼楽、経済、修身、裁縫、育児、等一切婦人の教育上の事は細大洩らさず記載して其第一号は来る十五日に発兌の筈にて其分を全国一般の女学校へ一部づゝ寄付せんと文部省へ願出られし由」

6月12～14日 「干渉の弁 傍若無人棲主稿」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 6月12日 「雑報」 「都草紙」昨年石町の著述堂から出版して大喝采を得た「新編都草紙」の廿三編までを室町の滑稽堂で譲り受け其後を綴り足し予約を以て何れも出版する内一着手の「唐土模様倭粹子」の上下二冊結局までは例の通り極美本にて出版し引つゝいて佐原の喜三郎も鬼神のお松も出版するといふ」

6月13～18日 「不貞妻」全四回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

\* 6月13日 「雑報」 「星五郎 飯田町の金玉社より新説暁天星五郎の第十八編十九編が出版に成ましたが茲等はそのろく阿波騒動に掛つて来て極凄味のあるところ」

6月15、17日 「頑固と卑屈との別 白骨居士稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

6月18、19日 「金が欲しい 半狂稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 6月18日 「雑報」 「新説暁星五郎 昨日の東京絵入新聞に銀座三丁目の書肆柳心堂山中喜太郎方より桃川如

燕口演伊東専三編輯で新説暁星五郎といふ書が前後二冊出版するといふ広告が出てをりましたが該書は飯田町三丁目金玉出版社の依頼に応じ桃川如燕が講談を補綴し伊東専三氏が編輯し該社より出版したる者にて伊東氏は勿論桃川如燕も山中方より出版の該書には毫も関係なき由なり」

\* 6月19日 「広告」 「銀座四丁目の書肆山中喜太郎方より迂生編輯の由にて新説暁天星五郎と題す書を出版致し候えど迂生が編輯せしは飯田町三丁目金玉社より出版の新説暁天星五郎にて山中方より出版の物は迂生へ一言の断りもなく発兌致し候事ゆゑ全店の星五郎には迂生毫も関係これなく候間此段愛顧の諸君に報ず／日本橋区本石町／一丁目廿六番地 橋塘 伊東専三」

\* 6月20日 「雑報」 「悪刷の読違 往時通人社会に行はれたる悪刷と云るは或は画様に或は文字に誹謗諷刺の微意を寓し巧に之をものして世に公にし以て遊戲の一部となせり是なん遊も仕了したと云ふ自称通人の為す業にて我面白の人騒せ楽屋の者には解し得るも他人の眼より視る時は容易に其寓意を悟り難き者なるが此程の開花新聞に日本橋の割烹店柏木の前にて斯る布札を拾得たりと其全文を載られしを昨日の絵入朝野新聞は其悪刷の全文を何と判読されしや該柏木を誹謗したる様に記載され痛く悪刷の弊を論じ剩さへ他を傷け己を利せんと謀る白徒の所為ならめと迄臆測の判決を下されたり元より件の悪刷は文字妙に纏り我々にも其寓意は知り難きも開花新聞に柏木の前にて拾ひ得たり云々とあるも蓋し亦深き寓意のあるならんか底にお氣が注れたるや注れざるや絵入朝野新聞は単に割烹店柏木の事と判読されしはチト仰山な比喩だが水滸を読んで水滸を悟らず源氏を読んで源氏を知らざる筋違ひの柏木保護説とや評すべき抔長々しき投書ありたれども箇は是れ前にも記す如く我面白の人騒せ新聞に載るも要なき業ゆゑ没書にせんかとは思ひしが開花朝野の両紙を読んで世人の迷を惹起し毫厘の差千里を誤るを恐れ余計な小言を申しおくのみ」

「紙幅拡張記事改良社告／弊社発兌絵入自由新聞儀愛顧諸君の御高庇に依り発兌の紙数日一日より増加し遂に今日の如き盛大を極むるに立至り候段弊社の幸福之に過ぎず難有仕合に奉存候就ては爾来当府下は勿論各地に探訪者通信員を増員したると愛顧諸君より投寄の玉稿続々相加はるとを以て限あるの紙面一々之を登記するの余地に乏しく為に報道の迅速にして記事の詳細ならんことを務めんとするも能はず往々看客諸君をして不満足を訴へしむる事なきに非ざるは社員一同の深く遺憾とする所に御座候依て来る七月一日より紙幅を拡張げ記事を増し殊の外読よき新聞に改良いたし数万の看客諸君に對して聊か愛顧の恩に酬ひんとす仰ぎ願はくは看客諸君に於ても弊社の微意を棄られずして猶此上の愛顧を垂たまはんことを尤とも定価広告料等の如きは是迄の通り据えおき聊少も變更無之候間為念併せて広告仕つり候以上」21日には、さらに「附て云す昨日の新聞には梅ヶ谷大達以下当時何も売出の力士拾名の肖像を描きたる石版画を付録として発兌致し候処意外の御高評を蒙り一時に売高を増加し数万枚刷立おき候へども尚不足を来し正午十二時には全く売切れ原画の石版も磨滅に及び何分にも間に合かね去迎折角の御愛顧に背き候も甚だ不本意の至に付き直に原画の描換に従事し速かに印刷の手順に相運び候就ては爾来本社及び絵入自由新聞社支局福字堂自由堂へ向け同日以来月極以上を以て直接に御注文の看客諸君に限り右力士石版画の付録相添へ直に配達可仕候尚ほ今後とも石版及び銅版鉛版等を以て時々面白き付録を相添へ発兌仕候間倍旧御愛読の程偏に奉相願候」と付言される。

6月21、22日 「洗濯の説 在伊香保 愛梅稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 6月21日 「雑報」 「戸田欽堂先生 孤窟情仙戸田欽堂先生には操觚名披露兼活奏曲譜の試験会を明後廿三日午後一時より両国中村楼に開かる、由此活奏曲と云るは西洋のホノグラフィと云る奇しき器械を模造し

たる者にて自然に声を発し長唄の汐汲。八千代。狂獅子及び春雨等を謡ひ出るの機関なりと云且其曲に合して市川金太郎（俳優の小役）并に柳橋芸妓の手踊其他種々の趣向ある由なれば当日は賑賑かなるべし」

\* 6月22日 「雑報」 「仏国新聞の発売高 目下仏国の首府巴里には七十種の新聞あり其内にて日々三千枚以上発売する者四十九種就中尤も盛大なる物はペチーショナルと云る新聞にて日々五十九万三千五百枚宛発売する由其他は何も十四万枚以下一万枚以上刷立ると云ふが我が日本の新聞などは之に較べて見るときはお恥かしくも浅猿く亦羨やましき限りなり」

6月24、25日 「女子に撰拳権を与ふ可し 植山子」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 6月24日 「雑報」 「日本人は猿猴に似たり 日本には未だ専売免許がないからどんな良い工夫をしても直に真似人が出来るとは儲もく、這回弊社にて石版画の付録を添て発売するや大に世人の喝采を得て一時に声価を博したるを見て羨ましくや思ひけん既に一二の新聞社にては弊社の真似を摸るよし弊社に取ては迷惑処か実に我国の傍訓新聞に石版の画を活用したる本家本元の元祖にして他の新聞社に良工夫を教へてやりたる無上の名譽と申すべしアナ喜ばし愉快く」

「出版 伊勢勝と言は本屋社会で名の高い芝浜松町の錦勝堂から「刺繡小常凌雲女丈夫」といふ今様本が出版しましたが美麗で安くて中々面白い又「新説暁天星五郎」の本家本元飯田町の金玉社からは其第廿編が発兌又通俗外交論は通三丁目の丸善書店より女盜賊峯国松（絵入合巻）は下谷西町の小坂方より出版になりました」

\* 6月25日 「雑報」 「活奏 前号にも載た通り一昨日両国の中村屋で開いた戸田欽堂先生の活奏曲譜試験会は最初に欽堂先生は場に登り此度小説家と成たる主意と該器械を発明（前号にホノグラヒーの模型としては

誤り)したる次第を述べ了つて芸妓の三絃に合せ汐汲その他の数曲を奏せしが実に稀代の器械にて唄の  
りは音声を出し合の手のをりは三絃の音を出す一器にして両曲を備へ其音玲瓏として宛然金鈴を振が如く  
棟梁の塵を動かと疑はれ満場の来賓たゞ感嘆の外あらずして了つて市川金太郎の舞踊あり世に珍しき器械  
にて又珍しき盛会なりし」

「記者曰す 従来弊社へ備ひ置ました画工大蘇芳年は今度都合に依て昨日限り解傭いたしましたれば看客も  
其お積で」

6月26〜29日 「蒸気車中の乗合話 香山陰士寄稿」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

6月26日〜7月1日 「親子がうへ」全五回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

6月27、28日 「怜悧の様な馬鹿漢 喃々子寄稿」 \* 「投書」欄に別行見出し。

\* 6月28日 「雑報」 「出版 神経闇開化怪談の第三号目は両国の大平方より出版歌舞妓正本仕立の絵入美本  
(略)」

\* 7月1日 紙面改良。五段組となる。なお、社主兼印刷人 松田脇知朗、編輯人 小林清右衛門に交代する。

7月1〜8日 「吊魂文」全六回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。7月1日冒頭に「左の一篇は弊

社長吉田健三が曩日亡友田中平八氏(即ち糸平)の霊を祭るの文なるが其文中或は商業上に関し或は処世  
上に係る者あり蓋し或は世に少補あらん平故に今ま之れを採録して首欵に填す読者諸君幸ひに焉れを諒せ  
られよ 編者識」とある。

\* 7月2日 「雑報」 「新聞改題 いろは新聞は紙幅を広げ絵入時事新報と開花新聞は西洋紙に改め絵入改進新  
聞と何れも今月中旬より改題の由」

「絵入朝野新聞 本日の広告にもある如く同新聞は本月中旬より其紙幅を拡張さるゝよし」

「出版 千石蔵譽礎と云ふ絵入美本が愛善社より（略）」

「広告」 「紙幅拡張広告」／弊社新聞の儀従来紙幅狭小にて充分に記事を掲ぐるの余地に乏しく看客の愛顧に負く恐れ有れば来る七月中旬より新聞代価一ヶ月金廿八銭となし大に紙幅を拡張し奇事異聞を罔羅するのみならず泰西諸国絵入新聞の体裁に倣ひ時々内外新奇の画図を掲げ論說雜録に至ては各主任を置き墨上漁史鉄腸居士も文章を投寄する筈にて一切の事務は浅野乾をして専ら之を担当せしめ編輯員一同益す勉勵可致に付何卒一層の御愛顧を仰ぎ候／但引続御購求被成下候御方へは七月中は是迄の代価にて差上可申候且つ七月十五日迄に前金御払込の分も期限相切れ候迄は是亦従前の代価にて差上可申候 東京銀座四丁目九番地／七月 絵入朝野新聞社」

7月3日～8月8日 「若枝廼初花」全三二回 \* 雜報欄にかぶせ見出し、年恒の挿絵つきで連載。

7月4、5日 「重罪」 \* 雜報欄にかぶせ見出し。

\* 7月4日 「雜報」 「政治哲学論集 英国ダビット、ヒューム氏原著土居言太郎氏訳土居光華氏の校閲に成れる政治哲学論集の第一巻を日本出版会社博聞社の両社より出版せり此書は曾て前号の紙上にも掲載せし如く篇題凡そ四十有余政治、文学、宗教、自由、權利、嗜好、風俗、商業、技術、租税、利息、其他雄弁利口、一夫多妻、稗史院本の末に至る迄悉皆く論じ尽し大小網羅して余さず恰も支那文人論客の文集を読如く演説家新聞記者等は勿論苟くも政論社会に立つの人は一読すべきの良書なり」

\* 7月5日 「雜報」 「大安売 日外から度々広告に出て御案内の新説暁天星五郎は外々にても翻刻をしたので本家本元の金玉社では発端より結局まで編りし半紙本の外に更に西洋仕立の美本を拵へ今日まづ西洋紙の

方を発兌し両様とも非常の低価で差上る事に致し当社内の出版社で大売捌を致しますゆゑ沢山御用を希ひ上ます」

「出版 小室信介氏の編述に係る東洋義人百家伝の第三篇を見光新聞社より出版されたり」

7月5、6日 「娘白浪」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

\* 7月8日 「雑報」 「市川団十郎 築地二丁目二十三番地平民堀越秀を教導職試補に補せらるゝ由にて当時其品行を取調中なりとかナールほど」

「又しても 先頃も悪刷の読違をなされて世人の一笑に附し去れたる或る小新聞は兎角間違つた事を載らるゝがお得意と見え一昨日の同紙上に今度市村座にて佐倉実記の民権演劇をするに付き見光新聞社より引幕進上の惣見物ソコで弊社でも負ぬ氣になり同勢白余名見物に押出さるゝ由劇場の見物まで競争とは誠に御盛く云々とあり他社様の事はイザ知らず憚りながら弊社にては如何に新聞が売たいとて景氣を取るため面白半分演劇見物の競争などゝは思ひもよらぬ僻事にて新聞紙は新聞紙らしく記事報道論説の堂々たる競争こそ為す事あれど夫さへ痛く我が頭上に其關係を及ぼさるゝ以上は成るべく避て実着に自由の針路を辿り行き真正の義務を尽さんとするは今将た云々と知れた事也悪摺の読違と云ひ此度の間違と云ひ斯様に誤りを伝られては甚だ以て迷惑千万などゝ真面目に書にも及ばず只だ一笑に附し去るらんのみ阿々」

「中つて碎ける 日外から諸新聞の広告にて御案内なる新説暁天星五郎翻刻の事に附て銀座の書肆山中喜太郎は該本の編輯人なる伊東専三氏を相手取て検事へ告訴したるより専三氏も又法庭に臨んで論弁する所るあらんと為たるが此影響は素の仲裁人なりし室町の書肆滑稽堂へ及ぼし滑稽堂は山中に迫つて大いに望む所るを述べ議論百出彼此紛紜茲に一場の葛藤を生ぜしに依り飯田町三丁目の金玉社と南伝馬町一丁目の春



陽堂が更に仲裁に這入或は伊東専三氏を説或は山中喜太郎を和め尽力一方ならざるより法庭をわづらはせし程の葛藤も一時に解け山中方にては東京絵入新聞へ広告せし暁天星五郎翻刻の広告を取消し又告訴も願ひ下を為し伊東氏は同伝記廿二編に於て廿一編の序詞を取消し又二三の新聞に掲げし広告の山中喜太郎は翻刻本に關係なき旨を再度広告する等を以て双方の和約全く整ひたれば滑稽堂と山中方の間も和ぎ一昨夜愛度和解と成り山中方にては昨日告訴を願さげ万々滞りなく相済しは雨降て地固るの辟言に漏ず同業中此後の交際も嚙深かる可く実にくつて碎ろの淡白氣性は好す可き事どもなり附て仲裁人は近きに日を卜して双方を一樓に会し将来親睦の酒宴を開くといふ

「広告」 「大安売の広告」／伊東専三編輯 国峯画／新／説暁天星五郎一冊／読切（定価五十錢／郵税十六錢）  
／右は洋製美本ページ三百三十枚／三十間堀二丁目／大売捌 絵入自由出版社／湯島切通／福字堂」

7月9～15日 「今年の伊香保 愛梅」全四回 \*雑報欄外に別行見出しで連載。13日から「春漣」著となる。

7月10～12日 「有為転変」全三回 \*雑報欄にかぶせ見出しで連載。10日は芳宗の挿絵つき。

7月11～26日 「太利亚国メルボルン府の景況」全一三回 \*雑報欄にかぶせ見出しで連載。26日末尾は

「未完」とあるが、続稿は確認できない。

\*7月11日 「雑報」 「石版画 本日の広告にもある通り来る十六日の弊社新聞には日本有名の俳優市川団十郎尾上菊五郎市川左団次外二名の肖像を描きたる石版額面摺の密画を附録として発行致します又た先頃附録として発行したる梅ヶ谷大達以下十名の肖像石版画を今度弊社内の出版社にて彩色を加へて鮮明に描直し発兌ましたれば沢山お購求を願ひあげます」

「開明小説四季の花籠 先頃の弊紙上に掲げ看客の娯評判に預りたる「知身雨」と題せし続話を今度絵入自

由出版社にて例の絵入美本に仕立て題号の名を附して昨日発兌したり」

7月13〜17日 「老爺の眼玉 半狂」全四回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

7月13日〜11月5日 「江戸桜遊里夜嵐」全七十七章 \* 雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。

\* 7月13日 「雑報」 「独逸奇書狐の裁判 本日絵入自由出版社より発兌したる石版密画入西洋綴の該書は独逸人ゲーテ氏原著井上勤氏訳述渡辺義方氏の校正に成り加ふるに有名の鴻儒依田百川氏の序評ありて名にし負ふ同国有名の奇書脚色巧妙文辞艶麗其筆力の縦横自在なる緻密に禽獄社会の情態を写し出し而して之を人類の情義に比し善惡正邪を判別する裁判当否如何を諷刺し無量の隱微を含畜せるは恰かも羅漢中の水滸の如く一読案を拍て奇と叫び再読巻を掩ふて快と呼び丁寧反覆熟読翫味能く其隱微を悟るに至りて始めて憤懣の情に堪ざらしむ実稀有の趣向なれば小説家は云も更なり政治家學術者に至るまで苟くも処世の道を知らんと欲する者は読ざるべからざるの一大奇書なり」

「記者曰す 来る十六日の新聞へは市川団十郎尾上菊五郎等有名の俳優の肖像を描きたる石版画を附録として発行いたす旨予て御吹聴致しおき升たが困つた事には右石版の画工事昨今病氣に罹り何分筆を採りがたく同日までには間に合兼ねますゆゑ来る廿五日まで日延仕つり候尤も延ました代り美麗の画を添て差上ますれば左様御承知下されたく社の為め稿條かくの如し」

7月15〜17日 「華族お若の伝」全三回 \* 雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。

\* 7月16日 「雑報」 「発刊 江湖の好評ありし金玉社発兌の新説曉天星五郎は一兩日以前に第二十三編の結局まで出版し亞で二編まで出たのは田辺南龍の口演伊東橋編輯に係かる本町小西屋政談一名テレメンターナ物語にて是は六編にて読切今月中には出揃ふといひ其あとは春錦亭柳桜の得意物で大さう凄い話で出る

といひ跡が貞山、貞吉、桃林、南玉などの物を追々と出版する大景氣」

\*7月17日「雑報」「二滴千金 憂世の涕淚（和綴全三冊）」と題する冊子は先に板垣君が海外より携帯せられし書にして昨年倫敦にて出版せしエドワードキング氏原著宮崎夢柳氏の翻訳演義せし者にて此度槍屋町の見光社より発兌せしが凡そ此の人間社会の邪悪なる分子を去り進んで改造すべしと云へることを大趣旨とし其間英雄烈女の伝記才子美人の遇合等より露国の虚無党仏国の共産党等の事情を詳記したる政治上の稗史小説にして一読愔夫をして起<sup>た</sup>しむるに足る頗る壮快活発の書也」

7月18日～8月1日「男女同権の結果如何 杞憂生」全一二回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\*7月18日「雑報」「狐の裁判 前号にも記載せし今度絵入自由出版社より発兌したる「独逸奇書狐の裁判」の原著者ゲーテ氏は同国有名の文学士なるが或る時政論上に罪を得て奸人の誣る所となり数度裁判所に出て対審の末遂に冤枉の罪に落たり茲に於てか氏は憤懣に堪へず意を小説に寓<sup>よ</sup>せ一箇の獅子王を提出し菽麦を弁せざるの暗王及び裁判官の不明に擬らへ又た一箇の老狐を提出して譎詐狡猾の奸人に擬らへ狸と猴を奸党と為し熊、狼、雉子、猫、兎、鶏狗を正党となし法庭に於て互に論鋒を研ぎ理論の舌戦尽果て終に之を腕力に訴へ決闘裁判を行なはしむ爾ば一篇の文字極めて奸人の狡猾を写し出だし徹頭徹尾獅子王の不明なるより正邪黑白を判知する能はず老狐の詐術に魅せられて果は老狐に国憲を付与し宰相の任を授けしかば世は狐の世となりて道德倫理地に墜つ浅猿しき有様となりたる事を滑稽諧謔慘憺痛楚千変万化の筆を以て縦横自在に著作したる無量の隱微を含畜せる慷慨無比の奇書なりと昨夜灯下に繙きしまゝ杜撰の評を下し畢んぬ」

\*7月19日「雑報」「改題 予て噂のありたる通り開花新聞は来る八月一日発兌の分より洋紙一枚摺となし改

進新聞と改題する由就ては当日改題式を向両國中村様に催ほし機械花火數十本を打ち上げ朝野の紳士及び同業者を招待し盛大の宴を張らるゝと云ふ又た当日の新聞には弊社の趣向を真似られ石版画の附録を添ふるゝ由」

「出版 脇田奇聞姐妃の高髻と題する例の絵入美本を琴平町の本阿彌方より出版せり」

「是も不景氣故か 他府県下は知ず東京府下にて売る合巻類俗に赤本といふ人情物その他はツイ二三年前までは其板元より小売の絵草紙店へ卸すのは大概定価の八乗（廿錢定価なれば十六錢の割）位にて夫を小売店では定価より一錢位引下て売しゆゑ卸小売等も利益が多かりしより板元も張込で美本を拵へたれど近頃引続いての不景氣といひ赤本流行にて何処でも爰でも数多く出版なすゆゑ其売先に困り板元は卸しの掛を下げ八を七とし七を六とし追々に下行て目下は大概定価の五乗（二十錢の物は十錢）が相場となり甚太しきに至つては定価の三兼（二十錢の物は六錢）など、云ふ物も有て此事は略購客も知るが故に小売店にても定価の一錢下や二錢下にては買人もなく然ば此如く卸し直を崩して板元に利益あるかと言に決して利益所ではなく其故は編輯者を撰び画工を撰び高き作料高き画料を出し彫刷製まで念入に拵へし本も新聞の抜がき写本の丸埋書生が夜延に寐言を書散して頓狎漢の人情物を綴り草稿はよろしう御坐りまするか草稿屋で御座イ（とも言まいが）片つ端売て歩行物を見倒して安く買ひ又は翻刻又はおつ冠せで紙にも彫にも刷にも拵はず拵へたひどひ本も前の様に注意した本も欲に迷へば見分る本屋が最も少く乗計り氣にしてゐるゆゑ定価は大がいに同じでも美本は卸し直が高く悪い本は卸し直が安いので自然と悪方へ取て掛り美方はだん／＼売口が遠く成につき赤本世界合巻社会は已に常闇の景況を現出たので目先の見える惻愴な絵草紙屋は暫時出版物を見合せる程な所る悪物屋の絵草紙屋は茲ぞ出版の爲所なりと東京名物の名汚しとも言可

きひどひ本をどん／＼出版し掛を安くして小売屋の目を暗まし又は田舎者の客を瞞着し一時は大さう儲たやうで有たがお客は買って読で見ると本が悪いのに面白くない事が一般に広まり今では滅多な本は買ぬやうに成つたので悪物屋は大きに困却し出版しても配賦くばり（東京中の絵草紙屋へ卸すをいふ）は僅に二百か三百資本所るか紙代も上らぬので今度はグツと手段を代へ当もないのにひどい本を先二千部計り拵へ此内千部は投といつて突然三掛位ゐで紙屑問屋へたゞき売夫にて紙代丈を取て置きあとは配賦と店売にて元も取り儲も見といふ苦しい商法に成り行たるが此頃は今日出版した本が直に今夜から大道の露店へ出定価二十銭位ゐる物が八銭か十銭で買るといふ物は今の投の紙屑屋より買て来る故だといふが是も不景氣から起つたでせう」

7月19、20日 「昔語」 \* 雑報欄にかぶせ見出し、年恒の挿絵つき。

\* 7月20日 「広告」 「開花／改題改進黨新聞／弊社新聞紙の義諸君の御愛顧に依り追日旺盛を極め候段感銘欣荷に不堪候然に社会の前進するに随ひ至要の事物多々益々現出し限あるの紙上を以て限なきの報道を網羅登記するの余地に乏しく為に諸君をして不満を訴へしめ愛眷に負くの憂なき能はざるは遺憾の義奉存候依而今般大に改良を相加へ一層規模を宏大にし更に来る八月一日を以て改進黨新聞と改題すると同時に従前の半紙判を改め陪大広幅の洋紙となし以て我が立憲改進黨の主義を拡張し記者通信員を増加し画図は彫刻を完美緻密に仕報道を迅速にし記事を周到ならしめ加ふるに日日平易の文章を以て婦女子にも解すべき論説を掲げ此一欄は党员諸名士に補助を仰ぎ狭少不完の新紙に引替広大綿密の紙面に仕候間江湖の諸君陪旧の愛顧を垂れ陸續御購読被成下度此段広告仕候也／但し新聞定価及び広告料（字数増）とも一切変更不仕候間此段為念申上候／発行所 東京京橋区南鞘町六番地 三益社／横浜住吉町四丁目 支局／大坂曾根崎小桜

橋北詰 支局／上州前橋北曲輪町 支局」

7月22～25日 「再開奇聞」全三回 \* 雜報欄にかぶせ見出しで連載。23、25日は芳宗の挿絵つき。

\* 7月23日 「雜報」 「八犬伝 近頃は翻刻流行にて有らゆる本へ手を附出殊に馬琴翁の八犬伝は空前絶後日本の名物丈ありて已に二三の書肆にても之を翻刻する物から校合の龔漏活字の不鮮明等にて古人の栄譽を害す様な物のみ出来其上途中で立消同様あとは跡はと急た所ろが一年待ども未だ出来ぬと飛だ先代萩の千松流が多い中に諸新聞の広告にも出てゐる通り南鍋町一丁目の兎屋で今度全部を一時に出版する大事業モウ已に九編の中途まで刷本は出来したるが此校合者は旧いろは新聞の三浦義方氏にて鼈頭の批評は西村宇吉先生なれば校正の誤りなどは薬に為たくもなく文中の隱微は批評にて発したれば錦の上の花とも言可く且活版印刷も極鮮明な上挿画は密を極たのみか木版の彫の宜事は幾層倍か旧本に優つてをりますが之が近々売出に成たら従来有る二三の途中本は月の前の星同様いよく光を失ひませう」

7月27日～8月1日 「血汐の紅る」全四回 \* 雜報欄にかぶせ見出しで連載。30日を除き、年恒の挿絵つき。

\* 7月29日 「雜報」 「自ら禁止 丹精して出版した本を出すと間もなく発売禁止の四字を冠らせるのが此店の名物でも有まいが元大坂町の書肆法本徳兵衛は曩にも福岡奇聞陸奥松風といふ本を出版し華族某何様より嚴談を受け発売禁止と成たにも懲ず利に走が書肆の本分といふ訳でもなからうが予て講談落語および劇場にては演事<sup>する</sup>を禁じられて有を知らぬか此頃また檜垣山名嘗碑と題して檜山一件を出版した所ろ一兩日跡の二三の新聞に法本徳兵衛の名を以て弊舖出版檜垣山名嘗碑儀事実相違有の嚴命に依て今回発売を禁止し残本及び木版等悉皆没収云々とせしに記者は偕はと思つてゐると其広告を載られし新聞社へ昨日警視庁より法木の広告中に其向より嚴達とあれど其向といへば当庁か内務省なれど其様な達を為し事なし法木が自

から発売を禁止し自ら残本木版没収云々広告せしは蓋し檜山の旧藩主より嚴談を受け夫に對しての事ならんに其向の二文字は甚太不都合なれば取消可しと口達ありし由なるが然もある可き事にて法本は殊更に其向の二字を濫用し引れ者の小唄とやらに似せ禁止を重々しくせんといふ巧には毛頭有らざる可けれど丹精をして出版した本も此仕義に至りければ心転倒して箇様な不都合な広告をせし物かと商人の腹の中を想像すれば狼敗するは道理にて又お氣の毒様の様にも思はる」

「小新聞記者兼小説家難義 幕府盛の頃は諸侯方に種々の騷動があつても当時専制の政度嚴しさに何も上を憚りて書籍に綴り出版する事は勿論迂闊に話す者もなかつたが近来は軍談に落語に新聞雜誌等の続物に喋々説く所となりしを以て華族方には只管心配され斯く御家物が流行しては往昔の隱惡を許かれ先祖の名を汚し家の瑕瑾となる事ゆゑ何とか手段を運らして之を予防せざるまいと発言されしお方ありしに忽ち多数の賛成を得て目下頻に御協議中なりと云」

\*8月1日「雜報」「廣告の有益 我國にては新聞廣告の有益なるを知ざる人も多けれど有繁文明を以て誇稱する西洋諸國は違つたもの六月十四日発売の倫敦タイムズ新聞は廣告の多きが為め非常に其紙数を増し全紙三枚を二十四頁に折て一部の冊子を成したる由尤も千八百六十一年六月二十一日（今を距る廿三年前）の発売以來斯の如きことあらざるなりと」

「地球上無比の書籍 当今英學を學ぶ人世に多く従つて其書籍も多くあれど單り文典を學ぶ良書のなきに學生の苦しむ事は今更記者が喋々せずとも已に諸君の知せ給ふ所なり然るに此度絵入自由出版社支局湯島切通の福字堂から出版した「英國文典独案内」といふ書はクエッケンボスの著述にて垣山緑氏が翻譯され加るに西村玄道氏が校閲されたる物なれば實に独案内の名に背かず之に依て學ぶ時は師を要せずして文典



の蘊奥を極め猶困難なる百千の英書をも読得る事の出来るは宛然灯を指すが如く瞭として最明かにて製本は美活字は鮮明誤字誤植は更に無く而して定価は僅八十銭なれば地球上無比の書籍と題するも敢て過言には非る可し」

\*8月2日 「雑報」 「半紙と洋紙の入替 予て記せし通り開花新聞はいよく昨日より西洋紙の新聞と改まり又いろは新聞は昨日より突然半紙五枚の新聞と改ました」

\*8月3日 「雑報」 「西洋奇説大日本発見録 一名日本外交起原史と題する書を絵入自由出版社より発兌したり此書は米人ヘルドリツチ氏の原著河原英吉氏の纂訳にて西洋人が始めて東洋に我が日本あるを発見したる事蹟より今日に至るまでの外交沿革を記したる者にて恰も彼の<sup>こゝろ</sup>龍が亞米利加を発見せしと同一の趣きある一大奇説なれば外交上に関する最とも有益の良書なり」

8月5、6日 「イヨー、イヤハヤの説 愛知浪人 仙里庵」 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

8月8、9日 「忠孝の説」 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

8月9、16日 「乞食金次伝」全七回 \*雑報欄にかぶせ見出し、年恒の挿絵つきで連載。

8月9、10日 「古疵漸く癒ゆ」 \*雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、年恒の挿絵つき。

8月13、17日 「起証誓紙の事 狐狸庵幽人 投稿」全五回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\*8月14日 「雑報」 「通俗自由政談演説会景況 去る十一、十二日の午后七時より日本橋区本町三丁目の亀の尾(待合)に於て開かれし該会の弁士は龍野周一郎奥宮健吉和田稻積の三氏及び其の他数氏にて何れも時事に適切なる論題に就き専ら俗談平話を旨として演られ演説の間龍野氏(自由の凱歌、東洋義人伝の内戸谷新右衛門氏の伝)奥宮(露国虚無党奇談)等の悲壮活潑なる講釈を交られ各各得意の雄弁を振はれしか

ば聴衆の方々も頗る感動されし有様なりき因に記す該会は元來世の所謂下等社会の田地を開拓し此の輩の爲めに自由の荷知たるを知らしめんとするの目的なれば尚ほ追々弁士の類をも増し盛に各所に於て開会さるゝ筈にて来る十六、十七日の夕景より本郷富士町二番地の千代本（待合）に於て一会催さるゝと云ふ」

8月15、24日 「貧乏人の子」全七回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。15日冒頭に「左の一篇は和田稻積氏が去る十一日の夜通俗自由政談演説会に於て演ぜられたる趣旨の大略を筆記せしものなり今ま茲に掲げて以つて看官諸君のお笑ひ草の種を蒔くと云爾 編者 識」とある。

\* 8月15日 「雜報」 「英国太政大臣難船日記 英人ヂュールス、ベルネ氏原著井上勤氏訳渡辺義方氏の校正に成れる題号の書（巻の一） 絵入自由出版社より発売したり該書は曩に出版したる三十五日間空中旅行の上に駕すべき有名の奇書にて英国国会議員の爆裂薬取締に對する政略を批難したる隱微を含める脚色高尚なる者なり殊に石版の密画ありて婦女童蒙にも読みやすく解しやすきやう綴りたれば諸君購て御覽なさい」

「小説の隱微 前項に記したる英国太政大臣難船日記の隱微と云るは当時英国の国会議院にて爆裂薬は兇暴残酷の頑民等が都府を碎き人畜を殺戮し自から以て得たりとする其暴惡を逞ましふするの利器となる最と恐ろしき害物ゆゑ之に對する嚴重の取締条例を設け外国よりの輸入を禁じ且つ製造の多寡を制限し容易に人民をして購め得られざるやうなさんと種々の法案を作りて衆議員に議せしめたるが可否の討論噪がしく遂に原案を賛成する者多数なりしたため此干渉ある爆裂薬取締の条例を施行するに至りたり然るに民間の論者或ひは各新聞紙は其政策の干渉固息なるを論じ頻に駁撃を試みたるも既に議院の可決を経たれば又た如何とも詮術なく爾るからに彼の有名なる小説家ヂュールス、ベルネ氏は早くも之を小説に編て該政略を批難せり今ま其脚色の概畧と其隱微の深遠なるを概記せん爰に英国の書生甲なる者所用ありて米国に航

り其帰路太政大臣号と云る風帆船に乗込たるに航海中船檣より火を發し積荷の綿残らず火となり□か豈図らん乗客の内英国の烟花師ありて其製造に用ゆる爆裂薬を米国まで買出に來り通常の荷物の如く粧ふて船檣に積込たり爾ば此事を聞く全船の人愕然色を失し其為す所を知らざるに至るまでを第一巻に綴りたり是より後の脚色と隱微は以下一卷つゝ、出版毎に読者諸君の注意を喚ぶため必ず紙上に掲出すべし」

8月16〜19日 「七歳児の切腹」全三回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。17日は年恒の挿絵つき。

\* 8月17日 「雑報」 「譚海 京橋区南鍋町の鳳文館にて兼て彫刻に着手せし依田百川先生の著述譚海上下二本共出来せるが此書は先生最も得意の著にて近代偉人達士名優慧妓其他雅言逸事及び閭巷瑣末の談俗を變じて雅と為し野俚を改めて高尚と為せしものなれば世の文才を達し文氣を暢べんと欲する者は必ず一読せざるを得ざる好書なり」

8月19日〜11月1日 「縁廻糸筋」全六三回 \* 雑報欄にかぶせ見出し、年恒、芳宗の挿絵つきで連載。

8月20〜23日 「恋路闇」全三回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。20日は年恒の挿絵つき。

8月21〜23日 「少年の洋行」全三回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。22日を除き、年恒の挿絵つき。

\* 8月27日 「雑報」 「清仏戦争実記 今度清と仏国とどんちゃん戦争を始めたる事柄の始めから今日に至るまでの事情并に今度の敗勝等尤も正確なる者のみを蒐輯したる題号の書籍を絵入自由出版社より陸續発兌致します且つ本編には精密に描きたる戦地の図并に戦争の図を加へたれば何方も発兌の日を俟て御購読あるべし但し其第一編は兩三日中に必らず出版又た予てお待兼ねの銃獵独案内はいよく来る九月一日より発兌ますれば同断御購読下され此銃獵書を読んで鳥獵を始めれば至て危険き火器を扱かひ弾薬を弄ぶも決して危険なく鳥獵の名人となること受合なり」

8月28～30日 「壁に馬」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 8月28日 「雑報」 「記者曰す 清仏開戦に就ては其報道の詳細ならん事を勤るに付従つて長文に渡れば紙面の都合に因止を得ず府下の雑事等は措て記さざる事あらん諸君其心して見玉へかし」

8月29日～9月2日 「支那の国柄」全四回 \* 「清仏事件」欄にかぶせ見出しで連載。

\* 8月30日 「雑報」 「今日新聞 今より八九年前の事なりしが高島藍泉氏（柳亭種彦）が社長となり銀座大路へ一社を構へ毎夕新聞といふを発兌し其日の事を其日印刷に附し夕暮より配達せしが何程もなく閉社なしたり此度仮名垣魯文先生の令息同苗熊太郎先生は今日新聞と題して其日の事を其日直に編輯印刷配達する神速なる新聞紙を発兌致し度旨昨日其筋へ願ひ出られたり」

9月2～4日 「騒ぐ事勿れ 愛梅」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 9月3日 「雑報」 「落語 落語家の巨擘談州棲燕枝は上州へ招がれ一昨一日乗込にて同所木崎の千代鶴亭へ出十五日間の話説は伊東専三氏が「恋瀬戸立哉白浪」と題して此頃駿州静岡の函右日報へ記されたる赤鬼忠吉鳴門のお玉の伝を演し続き物の封切帰京後本月十六日の夜より両国の橘家と新石町の立花亭と両席掛持にて右の話をすると云ふ」

「許可ならず 去る廿九日発兌の大阪の此花新聞を見るに今回の清仏開戦事件を挿画の小冊子となして発兌せんものと高知の或る新聞社員某が一昨日府庁へ出願したりしかど該件に関したる事は一切許可せざる旨にて願書は却下されたりとはお気の毒なとありたり」

「一万円の要償 大坂の立憲政党、朝日、此花の三新聞が神戸株式取引所に於て何か混雑ありし節其混雑の景況なりとて報道したるもの、中取引所及び役員を誹謗し名譽を毀損せしものありとて頭取堀官蔵肝煎城

山静一の二氏より右三新聞を相手取り大坂輕罪裁判所へ誹謗罪の告訴を為たる由尤も立憲政黨新聞丈は示談となり外二新聞は如何なりしや何しろ其要償の金高は一万円なりとか聞く」

「看客諸君に申上ます 府下及び各府県下とも是まで弊社新聞売捌き致させ置候ものゝ内都合に依て新聞紙の通送差止める事もありますれば各売捌店よりお購求め下され候おん方様へ万一配達致さる節は直に本社へお申越下されたく此段雜報中にて一寸御披露」

9月4〜7日 「死骸の仇討」全三回 \*雜報欄にかぶせ見出し、年恒の挿絵つきで連載。4日末尾に「雜報多端の折なれば事情簡端に記し付け七回を以て大尾となす可し」とあるが、続稿は確認できない。

9月5〜14日 「人の疝氣を頭痛に病むとは我が邦人今日の境遇乎」全八回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。5日冒頭に「左の一篇は一昨三日市村座の自由政談大演說会に於て和田稻積氏が演ぜられし所の大意を筆記せしものにて其の論旨の時事に適切なるものあるを以て掲げて本紙の首欸となす 編者識」とある。

\*9月7日 「雜報」 「講談 昨今瀬戸物町伊勢本の夜席にて「日本橋浮名歌妓」彼の歌吉吉安の情死一件を演じて大入を取る今様講談松林伯知は其件を読了ると直其あとは当社目今の続き物「死骸の仇討」を読由にて主任記者に付き今より筋を調べをれり」

「英米人形芝居 来る八日より十三日まで下谷佐竹の原にて興行する題号の芝居は余程不可思議奇妙稀有の芸を演る由にて既に此伎芸は曩に欧米各国皇帝陛下の御覧に入れ頗ぶる喝采を得たる面白き芝居の由なれば諸方も行て御覧なさい委しき事は広告に出て居ます」

\*9月7日 「雜報」 「教徒の暴行 去一日の夜京都新京極の芝居小屋にて仏教演說会を開きし時第三席川上

音次郎なる者が演壇に登り耶蘇か糞かと云ふ題にて喋々弁じ居たる折一場の騷擾を惹起したりとの事は已に聞込居たりしが清仏事件の繁多にして余白なきより其儘にして過たりしに今又同地より達したる通信に同様の騷動を記せり扱其事の大略を掲げんに彼の騷動のありたる翌夜（二日）も同所に於て同会を開きたるに弁士の登壇するや否や数百の聴衆はヒヤ／＼と異口同音に呼びたて其の喧囂一と方ならずがや／＼にて仕舞になりたる次席彼の川上音次郎が演壇に登り滅法乎仏法乎と云ふ演題にて喃々弁じ尽して下らんとするとき徳田松二郎、小野啓二と云ふ二人が聴衆の中よりツト立ち出で川上の傍はらに行き只今の演説は一向其の趣意解らねば短簡に今一応演られたしと頻りに請ける折柄聴衆の弥次馬連がソリヤ又耶蘇が飛出たぞ殺せ／＼と吐鳴<sup>どなり</sup>立て有合ふ土瓶茶碗杯を手に当に任せて投飛し乱暴を働くを臨監の警官漸々取静て十時頃立去せしが其他四五十人の輩は仮令警官の命なりとも趣意が解らねば退かじと強情張りし上に誰とも知ず巡查政川久次郎の眉間へ茶碗を投飛し軽傷を負せしかば予て斯あらんとて出張せし十七八名の警官は直ぐ其乱暴人を取調たれど更に分らねば居合す者百三十名を警署へ引致せられし時は恰も去三日の午前五時なりし扱警署にて右の者等を調べし上六名は拘留となり其他は責付宿下遠足留となり弁士川上も昨日午前十一時下京警察署へ拘引せられ目下取調中のよしに聞」

「洋学独案内誌 今度京橋三十間堀一丁目の明教社より毎月三回づゝ発兌する洋学独案内誌は英、独二学の初級たる西洋文字の発音より綴字、読本、文法書及び普通学科諸種の書に至るまで号を逐ひ編を重ねて丁寧親切に解釈を附し直訳意識の二体に分ち傍ら翻譯の材料に供する学術雑誌なれば或は僻遠の地方に在り或は人事多忙にして師を求むるに苦しむ人などには実に必要なる独学有益の良書と思はる附て云ふ本月中旬其第一号を発兌せらるゝ由なり」

「英国太政大臣難船日記」の第二巻を絵入自由出版社より発兌したり当編の目次は狂瀟火を告て拳船騒動す。危急に蒞んで良伴船長の職を襲ぐ。隱火遂に発して狂人自から焼死す。火勢海を焼き燄炎天に張ざる。怒濤船を衝て猛火頓に滅す。浮檣を攀て旧船長命を全たふす。扁舟に乗じて岩島を視察す。破船を出て衆人岩上に遊ぶ。追々難船の佳境に入り来りたれば予て前号にも記せし如く此書は元来英国々會議院が爆裂薬取締の厳令を布たるを批難たるの隱微あることを心に注て讀みたまはゞ必らず思ひ半に過ぎ思はず快と呼ぶなるべし」

\*9月10日「雑報」「西郷翁の劉銘伝 鶏籠の戦ひに仏兵を島地より逐払ひ其將旗までも奪ひしと世に伝ふる清軍の勇將劉將軍銘伝の大坂での人氣はゑらいものにて先頃東京で今迄負た事なき梅関に始て勝たる大達の評判にも異ならず此を狙込み同府下の或る写真師が一種の工夫を案じ附け十年の戦乱以後世に弘まりたる西郷翁の写真と云ふに支那の軍服を着せ此を劉銘伝の写像なりとて一枚八錢にて売出したるに人々は此を見てコレは不思議ぢや此顔はトント西郷さん丸写ぢや何さま左様ぢやシテ見ればあの軍の折り西郷さんは唐へ逃て往なはれたと云ふたは本ぢや此劉銘伝は西郷さんに違ひ無い道理こそ仏蘭西もヘゲ垂たちや何も私も最初から例ものチャン／＼さんの手際にしては好と思ふたぢやと此評判が高くなり己も西郷さんの支那人になつた写真を買<sup>か</sup>う私にも一枚売て下はれ此所へも此方へもと遊行上人の往生札か田舎大尽の施行米を受けるが如く其店先は朝から黒山の如き人多<sup>ひ</sup>集<sup>ただかり</sup>にて彼の写真屋は莫大の利を得たり此が今度の事件に付き当地で金儲の隊長にて候との通報ありし」

「改名 桂派の落語家中にて其人ありと言れたる桂文鶴は今度五代目翁屋さん馬と改名したり就て云ふ同人の新作「七不思議名所之仇討」といふ話は中々面白く出来てゐるので改名早々浦和駅から招待され近日其地



方へ行き一興行して立ち帰つてより盛な名弘会の興行をする由」

「五人男 春錦亭柳桜の口演にて伊東專三氏が編輯された雲霧五人男の初編が飯田町三丁目の金玉社より出版しましたが是は雲霧仁左衛門、洲走熊五郎、因果小僧六之助、木兎権次、山猫三次等の列伝を記し物にて二十編大尾の後は渠曉天星五郎の如く立派な読本にする趣向であり而て初編は甲州茨沢村の偽役一万両を騙り取り五人の兇賊が妙見が峯の勢揃ひ芝居なら三立目といふ金襖の詰開きで有ります」

\*9月13、14日「稀世の操觚者」 \*雑報欄にかぶせ見出し。「稀世の操觚者 只東洋とばかり日本だか支那だ

か但しまた露西亞だか底までは知り得ざれど此程或所より出版したる〇〇〇と題する書は西洋古代の革命記を小説体に纂訳補綴されたる者にて其文辞の艷麗なる其脚色の巧妙なる愛国慨世の志士中沈着にして謀慮に富たるあり勇武にして過激に失するあり果斷にして道義を重するあり或は賢婦の伶俐にして才子に思を寄するあり正邪の政党軋轢して互に雌雄を競ふあり人情世体当時の様を一々に写し出して恰も其人に接し其体を見るが如く一たび巻を開けば意氣自から壮快を覚え情夫をして卑屈無氣力の迷夢を醒さしむるの筆力ある実に東洋開闢以来最も当世の風潮に適したる未曾有の一大著書なるゆゑ評判忽ち四方に聞え其売高も数万部に上り再三版を起すに至りたり従かつて著書の名も一時に江湖に轟ろき渡り実に彼は羅馬の古代学者プラト―希臘のアリスト―トル両氏の上に駕すべき古今独歩の大学者かなと甲唱へ乙伝へ為に洛陽の紙価を騰貴せしめために世の耳を聳せしめたり去程に右の大学者先生は此の一大著書を出版せしたる莫大の潤筆料を得られたるも素より磊落たる先生の事なれば敢て之を囊底に貯はへず右の著書より得たる金を世界漫遊の旅費に充て尚も學術研究の爲め風土人情政治の如何を事明細に視察の爲め或所より汽船に搭じて何処ともなく消失られたり爾ば世上の人々は今度先生漫遊の後再び故国へ歸られなば又た如何

なる著述やあらん定めて世を益し国を利する大著述のあるるべしと頸を伸し指を屈りて帰国の期を待ち居たるが爰に一人の活眼者ありて右大先生の一大著述は脚色事実文章とも少も違はぬ西洋の原書ある事を発見し決して大先生が右の著述に附記したるが如く最も稀なる万巻の書籍中より引用し纂訳補綴せしには非ざるなりと或人に物語られたる其次第は次号に記すべし」

「稀世の操觚者（あやう）（あやう） 其活眼者の或人に対して物語られしを又聞に聞得たるに活眼者の云らく近来東洋の文華日に月に隆盛の赴ふき著書出版は稍や自由を得たるより一利一害は世の免かれ難き数にして何の書肆も新規の著書を出版せざるはなく操觚者も亦た新を競ひ奇を争そふて我こそは世の耳目を驚かし最大の名誉を博せんと或は翻譯或は翻案或は拔書或ひは剽窃換骨奪体は諸置て人の憤鼻褊で角力を取る新聞統話つぎものの拔萃等人情話の粹脚色すじから革命余譚の勇ましき小説に至るまで森羅万象事々物々皆之を筆せざるなく皆な出版せざるはなき故此等新著の書籍の数は幾万巻の多きに上りしや牛に汗し棟に充る処か之を解ほぐして敷紙としたらんには比摩良耶山をも貼拔にすべく実に盛大を極めたり斯る有様なれば杜撰の書殊に多く此弊風追々に増長し近来に至ては新著の書籍一として見るべき者なし然るに或所より出版したる〇〇〇〇の評判世に噪がしく彼書は実に前代見聞東洋開闢以来の傑作なり彼の著書は古今独歩の大学者なりと行く所として噂せざるなく耳喧ましきまで言囃すゆゑ開も如何なる書かと一本を購めて繙とき見たるに実に世間の風評に違はず当時の人情世体を写し出して東洋人の耳目を一新せしめたる縦横自在の筆力と云ひ脚色文辞の高尚と云ひ奇なり妙なりと称するの外評すべき詞なく呆と計に感嘆せしが再び三たび閲する内其の文中「何氏の何々書」より引用せしと云ふ其引用書に付て一の不審を生ぜり开を如何にと尋ぬるに引用せしと云ふ書籍は何も世に稀なる西洋古代の珍書のみにして中には名のみ聞知て世に伝はらざる者あり若し之あ

らば実に珍らしき物にて現に文華の中心とも謂つべき西洋諸国に於てすら一冊の価格十四五万弗に上ると云ふ最とも貴とき古書にして其他の引用書も英仏諸国の博物館にて稀に見受る処なれば未だ東洋諸国へ舶来せし事なく又た此の○○○○の著者なる何某も未だ西洋へ航りし事を聞かず去ば此著者は如何なる処にて此等の古書を読み此等の古書を引用して此一大著述をなせる乎と半信半疑種々に穿鑿して見た所豈らん此著述には西洋原書の在るありて只た之を翻譯せしに止まり決して此等の古書を通読し最大の学力を以て纂訳補綴せしにはあらざる事を発見したり去にても世間の人が此点に眼の注ぎざるは著者の為には僥倖なるも一体の眼より見る時は東洋の学芸未熟にして所謂盲目千人の寄合なるは実に嘆息に堪ざるなりと眉を顰めて語られたる由」

9月14～19日 「新橋奇遇」全三回 \* 雜報欄にかぶせ見出しで連載。

\* 9月16日号外附録 「天には不時の風雨あるは予じめ知難きものから今茲は是迄平穩にて二百十日二百二十日の厄日さへ事なく済し事なれば小厄日とする旧暦の二十六夜則ち昨十五日も定めし清明快朗にて神田祭の賑ひに連れ真夜中の三光を見んと高輪始め其外の高台へは人も群集するならんと思ひきや朝よりの雨漸々風を添へ午前十一時には全くの嵐と成り戸を破り屋根を飛ばし人を倒し道を遮る其暴状一方ならざれば損害を蒙る方定めし多からんと思ふ中にも当社は前に三十軒堀の川を帯び三原橋に添たる折曲りの角なるゆゑ東南の風の当方又尋常ならざる忽地にして二階なる版本師活版師のをる所の張出し屋根のトタンを吹飛ばし見る／＼柱等も打折て編輯局の窓を破れば風雨吹込で筆墨も使ふに由なく下の方は小使部屋配達部屋等瓦屋根を吹破りて大道と齊くなり印刷場の蒸氣器械も燃出しを吹折れしまゝ運転の自由を束縛されぬ然ば斯の如くの景状なれば嵐のこと清仏のことその他聞込たる事種々あれども如何せん編輯印刷に従事する能

はず且清仏事件に係る事は別に然したる報道もなきは蓋し暴風雨のために諸方の電信不通とも成たる故か不時の休刊本意にあらざれども前に述べるが如き損害を受たため事の茲には及べる物なり看客諸君且く報道の怠りしを咎たまはで明日の新聞にて演尽すを御覧あれば幸ひ甚だし」

\*9月17日 「雑報」 「お埋合 昨日は号外を以て御報道申し上たる如く弊社も暴風雨の爲め非常の損害を受け止を得ず一日臨時の休刊仕まつり何共申訳之なく就ては右お埋合として来る廿二日月曜日の定時休刊を休刊仕まつらず平日の通り新聞紙発行いたしますれば左様御承知下されべく候」

「五人男 伊東専三氏著の雲霧五人男第二編は例の金玉堂より出版したり当編は達磨の長次召捕より五人男の素性を明かにし木兎権次州走熊五郎の再会日本橋木原店住居の場の記事です」

\*9月20日 「雑報」 「許可 仮名垣熊太郎大先生が今日新聞といふを出願された事は先頃鳥渡載しましたが右は昨日許可に成りしを以て来る廿五日より御発行」

「広告」 「今日新聞絵入傍訓／毎夕発売／右は西洋の「イブニングニュース」に倣ひ其日の事を其日に編輯して黄昏までに配達する新聞紙中の新聞紙にて毎号二個の図画を加へ雑報は童蒙方にも分り易きやう俗談平話の文に綴り又折々は「ポンチ」風の狂画をも差加へ都て迅速と面白いとを旨とし来る廿五日初号発売仕候間陸続御注文の程奉願上候／（新聞定価）一枚金一錢〇一ヶ月前金廿錢〇三ヶ月同五十五錢〇但し大祭并に日曜日休刊／明治十七年／九月 東京々橋弥左／衛門町一番地 毎夕社」

9月22、24日 「戦争の結果に二様の別あるを論ず」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

9月24日～10月1日 「旅日記 和田稲積」全七回 \* 雑報欄外に別行見出しで連載。

9月25日、10月1日 「通俗 伊香保政談 鉄卿生稿」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。25日冒頭に「左

の理屈は這間上州伊香保より帰郷せし社友の投寄せられたるものなり清仏事件の如く切迫りたる論説にあらずと雖も聊採るべき所なきにあらざるを以て漸を追ひ本紙の首歟に掲ぐるごとく、致しました看官左様御承知を願ひます」とある。

\* 9月25日 「雑報」 「石版画の附録 予て申し上置たる通り今日の新聞には仏国の大統領及び清国皇帝の肖像を描き傍ら軍艦の上より大砲を撃出すの真図を精細にものしたる石版密画を附録として発行致したり尤も此附録は無論無代価に候へども売捌人等の中にて万一代価を頂だき候者ありましたらば直に本社へお通知下さるべく候」

9月26〜28日 「先生と云はるゝ程の馬鹿 半狂記」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

9月26日〜11月7日 「英国倫敦旅日記」全二回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。9月30日、10月31日は芳年の挿絵つき。10月5日には「記者曰す 英国倫敦旅日記の亞稿は続々届いてをりますれど昨今は緊要の種多く余白なきまま両三日お預りと致し升たが明後日は屹度<sup>だて</sup>掲<sup>か</sup>げ」と断られる。

\* 9月28日 「雑報」 「白露革命外伝自由の征矢」と題する英国デユールスベルネ氏原著の最と面白き小説を井上勤氏訳渡辺義方氏校正にて例の絵入自由出版社より翻訳出版の手順に運び<sup>とうじ</sup>昨今印刷中の由なれば遅くも来月中旬には発兌すべく同書は最とも現今の風潮に適したる活発悲壮の小説なる由」

「新編囃阿虎 先頃の弊紙上にて御高評に預かりたる該話を例の絵入美本に仕立絵入自由出版社より発兌ましたれば沢山お購読を願ひます」

10月2日 「記性の益」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。末尾に「未了」とあるが、続稿を確認できず。

\* 10月2日 「雑報」 「嫌疑 自由童子と自称せる福岡県士族川上音次郎なる人は国事犯未遂人と認められし処

此程京都を逃走したるを以て探偵中なりとか又同地島原の遊廓太夫町に寄留せる愛知県士族小野田光人は旧愛国交親社員暴動一件に關係ありとの嫌疑にて捕縛の上拘引されしと」

「警察新報 尾張町二丁目の警察新報社より社名の如き新聞を来る四日より日々発兌する由委細は広告を見られよ」

10月2、3日 「星亨氏拘引の始末」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

\* 10月2日 「広告」 「警察新報」ふり仮名附毎日発兌日曜日大祭日休刊／第一号発兌十月四日／第二号以下は十月十日より／定価〇一枚一錢〇一ヶ月前金廿三錢〇三ヶ月同断六十六錢〇一ヶ月同断二円五十錢〇送込費毎日逐り一ヶ月廿五錢〇一ヶ月九回送十七錢／本紙は専ら東京および各府県の警察に関する細大の事件を旨とし其外毎日の新聞奇談を網羅し識者にも婦女子にも読み易き文体を以て記載し事柄の確実なると報道の迅速なるを主といたし候へば世間に取りては必読の新聞なり御注文のお方は直に本社へ御通知下され候様奉願候／東京尾張町／二丁目一番地 警察新報社」

10月3、4日 「人間の真価を論ず」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。3日冒頭に「左の一篇は社友三禾生が傾者青梅町の学術演説会に於て演説せし大意を筆記せしものにて極めて因循の説なりと雖も亦た聊か採るべきあれば本欄に掲げて江湖に示すと云爾」とある。

10月5、8日 「泣面を蜂が螫すとは清国の云ひ乎 在三河西尾 鈴樹干城子寄稿」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\* 10月5日 「雑報」 「出版 牡丹燈籠の九編は稗史社より敵討浮木の亀山一部二冊は稗史共隆社より絵本八犬伝一冊は金栄堂より何も出版しましたが何も至極面白ければ何も方も御購求あれ」

10月9～14日 「吾々赤貧者は社会に對して誇るに足る 和田稻積 演説」全四回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\*10月9日 「雜報」 「新書出版 銀座の共隆社より「世者情浮名横櫛」（全一冊）「春色黄金花」（全一冊）人形町通りの武田より「温故実譚七種草紙」（全一冊）と云何も絵入美本（略）」

10月12、15日 「誤魔化しの弁」 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*10月12日 「雜報」 「出版（略）また「自由艶舌女文章」と云ふ絵入美本を自由燈出版局より新書出版」

\*10月14日 「廣告」 「小室案外堂主人著 大蘇芳年翁画／自由艶舌女文章／一袋二冊読み切り定価金三拾錢／右は自由燈の紙上にて世の喝采を博せし微妙の寓意ある当世の小説なり這回美本に仕立弊局に於て出版したれば陸続御購求を希がふ／発兌元 京橋区／鎗屋町 自由燈出版局／売捌所 銀座四丁／目三番地 山中喜太郎／右の外各書林絵双紙店へ差出し置候間御最寄にて御購求を乞ふ」

10月18～21日 「少し癪に障る 自由狂夫投書」全三回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

10月22、23日 「衛生を論じて清仏の勝敗を卜す 在相州肉食主人 寄稿」 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*10月25日 「雜報」 「大成館 今回京橋区竹川町十九番地に設けられし大成館といへる予約出版社は華族関博直氏館主となられ事務を統轄せらるれば彼の資本薄弱にして中途に倒るゝが如き尋常流行の会社と違ひ組織も頗る堅固にして出版事業も亦盛大にさるゝ目的にて第一着には明治字典史記等を出版せらるゝ由委しくは本日の広告を見らるべし」

10月26日～11月15日 「娘白浪」全一一回 \*雜報欄にかぶせ見出しで連載。

\*10月26日 「雜報」 「清仏船栗毛 昨日南伝馬町の松成堂から初編を発兌した清仏船栗毛といふは浅草葉研堀



の芥子面弗良兵衛おなじく品八といふ二人が清仏の戦見物に行といふ趣向で都て一九の膝栗毛にならへど伊東専三氏が新奇妙案の戯作にて側ら目下の流行を穿ちカビの生た洒落や青臭い口調を一切抜にしてお臍でお茶を湧させる珍本です」

10月29～31日 「移住論 白骨居士」全三回 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

\*10月30日 「雑報」 「金瓶梅 曲亭馬琴翁が有名の名作金瓶梅を今度合卷一冊西洋綴の美本に仕立て清水米洲氏が編輯出版にて長谷川町の武田方より発兌になりたるが挿画製本とも頗ぶる上等の美本なり」

「広告」 「いろは新／聞改題勉強新聞広告／本社新紙今／前記の如く改題仕り四方愛読看客／の厚顧に答へんが為め更に紙幅を改良し大に記事の項数を増さん事を謀り改めて旧刊の洋紙一枚と別に半紙の附録二枚を増加し本紙には専ら官令、新聞投書、雜錄、評判、風流等の雜報を滿載し附録には鮮美の挿画を加へ每一葉に各一種の続物語一章づゝ十二分と記載し其話の局を結ぶに至れば儼然なる二部の冊子を成す（附録は時々彩色摺の美麗なる表紙を附呈す）の趣向にして華実兼備はり細大遺さず当新聞紙（マ）一部を講読せらるれば一家老幼男女各自其嗜好に適し便利至極無類徳用の最良新聞たるは一目瞭然に候得へば第一刷発兌（来る十一月三日）より相替り更に幾層の愛顧を購はんことを是祈／定価 一枚従前の通 一錢五厘／一ヶ月分前金 三十錢／三ヶ月分同 八十五錢／半ヶ年分同 一円 六十錢／東京京橋区／竹川町十四番地 京文社」

11月1、2日 「移住論を読んで感あり 半狂」 \*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\*11月1日 「雑報」 「五大州中海底旅行」と題する西洋の學術小説（上編一卷）を京橋新肴町の四通社より発兌したるが該書は彼の有名なる小説家仏国ヂユールス、ベルネ氏の原著にして太平三次君の訳述に係り服

部誠一君の校閲に成り文辞艷麗脚色巧妙細密に海底の形況を写出し殊に石版画の美術数十葉を挿入あれば近來新奇しき一大奇書なり」

「提灯持 朝顔残秋月と題する上下二冊袋入の絵入美本を例の共隆社より出版是は義太夫節の朝顔日記を翻案されたる面白き小説なり」

「広告」「国民の本筐出版広告／今仏蘭西に行はるゝ国民の本筐と唱ふる書籍は古へよりの有名な図書は何書となく之を何冊にも別ち価を廉にし諸民一般譬へば婦女子に至るまでも容易く買ひ得べきことの便利を謀りたるものなりと聞き依て此の本筐の例に倣らひ有名な稗史小説書を先とし一冊価へ金十錢と定め来る十一月十日真田三代記より漸次く出版致し年月を累て以て本筐の全備を為んとす幸ひに諸君の愛顧を蒙むらば本社も随て金筐を積に至らん（略）明治十七年／十月 出版所 成文社」

11月2日～1月27日「嫉妬刃」全六六回 \* 雜報欄にかぶせ見出し、年恒、芳宗の挿絵つきで連載。

11月4～7日「解党大意」全四回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。4日冒頭は「我が自由党の解党せし事は已に江湖に報道せり今茲に去る二日の自由新聞紙上に掲げたる解党大意と題する文章をば傍訓を付し且つ其の意の俗に通じ難きものを解釈して以て本紙の首欸に填る所以は世人をして普ねく自由党解党の旨意を知らしめんとするの精神なり愛顧諸君其の心して読み玉へ／編者識」とある。7日末尾には「編者曰く今回自由党の解党に就ては尚ほ此の外に詳細なる意見もあるべく又た世の論者中にも彼れ是れ議論あるべし兎に角く我が政論社会の一問題となりし事なりと考ふれども此の事に関して未だ花々敷論陣を開きしものなく唯だ改進黨の機関とする所の東京横浜毎日新聞及び自称独立党の機関新聞即ち朝野新聞に於て一応の論を記せしのみ其の他は東京日々新聞明治日報の如きは齒牙に介するに足らざるなり尤も立憲

政党新聞は遙に大坂に在つて大ひに之れを賛成せしが如しと雖も之れとても左まで見るべき論にあらず左れば此の事に関したる弁論討議の是非勝敗は未だ見る事を得ざるなり余輩元より一定の所見ありと雖も敵の未だ来らざるに銃装を為すの大早計に失するを知らば暫らく黙して待つ所あらんとす依て筆の序で之以つて茲に之れを附記すと云爾」と付言される。

11月4、5日 「共同競馬の景況」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

11月4、5日 「布哇事情」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。5日は「布哇国事情」となる。

\* 11月5日 「雑報」 「勉強新聞 予て広告にも出てゐるいろは新聞改題勉強新聞はいよく一昨日より洋紙一枚摺となり附録には続き物を載せられた半紙二枚づゝを附け記者には木原店の三代目風来山人が入社され本紙も至極能なりし上附録一つの方は風来山人の筆に成り一方は伊東専三氏が助筆され柳亭燕枝の落語で名高い箕吉殺しの実説です」

「広告」 「英国ロードリトン著 織田純一郎先生訳述／通俗花柳春話 第四篇 全四卷／四十五錢 合本一冊／活版洋書計画入 定価一円八十五錢／右は英国有名の小説にて其風流の趣は人をして或は歎ひ或は悲み覚へず奇妙と呼しめ且文章は綺語麗句なるを今回平仮名を以て綴りし上数多の挿画を加へたれば婦人幼稚の諸君にも極めて解し易きは固より最面白き新話なれば続々御購求あらんことを祈り奉る／東京書肆呉服町十二番地 阪上平七／売捌 南伝馬町一丁目 叢書閣／書肆 大阪備後町四丁目 梅原亀七」

11月6日～2月3日 「双調三味線」全六一回 \* 雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。

\* 11月7日 「雑報」 「精註唐宋八家文 兼て評判のありし石川鴻斎翁が畢生の精力を尽くして集註せられ清人高梅亭の評本を増加したる唐宋八家文の第一帙(四冊)が南鍋町の鳳文館より出版になりしが正版にて彫

刻も至つて鮮明の美本なり」

11月8、9日 「板垣君大坂懇親会席上演説」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。8日冒頭に「余輩は前号の

紙上に於て自由党解党の大意を掲載せしが今又た茲に板垣君の大坂懇親会の席上演説を登録して以つて世の自由を愛するの士に示さんとす而して之れを俗解せんとせば恐くは原文の体を傷け竟に同君の意を害ふことあらんか故に唯だ傍訓のみを付して写す事となしぬ読者諸君請ふ焉れを諒せられよ 編者識」とある。

\* 11月9日 「雑報」 「福岡日々新聞 同新聞は曩に記せし通り数週間休刊したるが去る一日より陸続発行す其紙幅を広め記事も頗る改良されたり」

\* 11月11日 「雑報」 「時事新報 同新聞は来明治十八年一月一日より十二月三十一日まで一年三百六十余日々曜日を除くの外は大祭日祝日たりとも休刊せず日々新聞を発兌する旨を其筋へ届け出たり」

11月13、14日 「馬流村暴動の続き」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。13日冒頭とは「埼玉暴徒が今回の挙動に及ぶたる其目的の概略は追々本紙上に記載したるが暴徒の中に左の如き約束書を携帯し居たる者ありと」とあり、題名は14日による。

\* 11月13日 「雑報」 「時事新報 同新報は来十八年一月一日より日曜日を除くの外は大祭日祝日たりとも休刊せず日々発兌する由を前号に記しましたが右は来年からではなく直ちに実行するとの事ゆえ正誤かたぐい記し置きます」

「爆裂薬条例 一利一害は数の免かれざるものながら爆裂薬は岩石開鑿其他に利用多けれど茨城暴徒が之を害用したるより其筋に於て何とか取締法を設けざるべからずとの議が起こりし由は聞及び居たりしが已に其取締条例の草案も出来せしとの事なれば不日其筋より発布さるべしと」

「東洋学芸森羅万象」と題する雑誌を今度我が絵入自由出版社より毎月三回づゝ、発兌致します茲雑誌は洋算、簿記、書法、討文の四項に記載の種目を分ち目下専ら公私諸学校にて用ゆる教科に適する種々の学芸を一読して解し易きやう解釈したる者を追々に掲載する由なれば学者の為には有用無比の冊子なり委細は広告を参観せ」  
みそなは

\*11月14日「雑報」「出版 絵本真田三代記の第一編は京橋区加賀町の成文社より近古慷慨家列伝（全一冊）

は南伝馬町の春陽堂より出版し印刷は彼の飯田町の金玉出版社なり」

11月14、15日「野蠻の精神」\*「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

11月15、16日「暴動の原因」\*雑報欄にかぶせ見出し。

11月16、27日「軒端廼深雪」全六回 \*雑報欄にかぶせ見出しで連載。

11月19、21日「天下人民の共に惡む可きものは何ぞや 在三河西尾 鈴樹干城子寄稿」全三回 \*「絵入自由

新聞」欄に別行見出しで連載。

\*11月19日「雑報」「白露革命外伝自由の征矢」と題する小説を絵入自由出版社より発兌したり右は彼の有名なる西洋の小説家ヂュールス、ベルネ氏の原著にして井上勤氏の訳述に係り渡辺義方氏の校正に成り加ふるに一松斎芳宗の美麗なる密画を加へたれば其体裁の整ふたるは云ふ迄もなく脚色巧妙文辭艷活才子佳人が自由を愛し貧民職工が貴族の専横を恨み終に革命を企だてしも首領と頼む一個の壮士が一度事を誤まりしより事空しく画餅に属し怨みを吞で死するに終り看客をして切齒扼腕奮起の志しを立しむる最とも当世の人情に適合したる勇壮活発の小説なり」

「副島侍講の近況 侍講には過日より養病の為に引籠り居るらるゝよしなるが頃る頻りに春秋左氏伝公羊

伝国語儀礼其他秦漢以前の封建制度に関する種々の書籍を取調べられ日本帝国の治安を維持するがために  
は到底封建主義に依らざる可らずと申されしにや取り沙汰すれど侍講は曾て民撰議院の建白者たる一人な  
れば今更に封建主義に依るなど、は思ひも寄らぬ次第ならめと存ずれども如何のものにや」

「俠客伝 日本橋檜物町の加藤正七方から本町俠客伝一冊が出版」

11月20、21日 「戈登將軍の略伝」 \* 雜報欄にかぶせ見出し。

\* 11月21日 「雜報」 「時事新報記者降旗を掲ぐ 凡そ大法螺を吐立て幼稚の社会を瞞着しお山の大将我一人  
の声価を博し而て己を利せんとする者は古が今に至るまで文化生中に開けたる社会の上に往々現出する者  
にて其大法螺が旨く中る時はお慰みだが失策ふと大な胡慮ものわづらひとなるものなり見よく時事新報記者は此頃日  
曜日を除くの外大祭祝日は勿論元日でも大晦日でも雨が降ても鎗が降ても一切お構なく時事新報の発兌日  
数を増し社会に向て我一人日本全国の新聞屋に卒先したる勉強の効能を見せんと企だてたり当時の口実に  
曰く凡そ新聞紙たる者は社会の耳目なるが故に社会の運動の休まざる以上は一日半時たりとも無駄に休刊  
て社会の耳目を掩ふべからず依て我社は発兌の日数を増し日曜日を除くの外一切休刊せざる事となしたり  
云々成程其御論は御尤も至極御道理千万なれど新聞紙は社会に對して尤とも必要なる者ゆゑ一日半時も無  
駄に休刊するは社会の耳目を掩ふに齊しとの必要の点より論じたならば日曜日として社会の運動が休むと云  
ふ道理はあるまじ然すれば日曜日も亦た新聞紙の必要あらん然るに事の爰に及ばざるは六かしく申せば自  
家撞着やさしく云は前後合ぬ不都合千万の効能書葉餅能書ほど利かざるが如けんと聊さか疑団の解ざる  
まゝ右の故由を記して時事新報記者に一寸と御注意申し上しに流石世事に抜目なき三田の台の老先生もチ  
ト弁解に窮されしと見え種々弥縫されたる末終に或人の投書に藉て「日曜日までも休刊せざる覚悟なれど

夫迄は手が届かない」(思ふに會計上の御都合か)と言囁め終に我々の弁難に對して降旗を紙上に掲られたり最初から斯う云はれたらんには我々の為に一本駭まどられもせず雉子も鳴かずば撃れまじきに爾さきとは氣の毒笑止千万」18日には「何故日曜日に休むか 傍觀生」という投書を掲載していた。

11月22、25日 「英國を見よ」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

11月27、28日 「學術演説と政談演説 半狂」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 11月27日 「雜報」 「八犬伝刻成る 近頃鰻刻の流行出し、を以て曲亭翁が傑作の八犬伝を鰻刻し一時に大利を得んものと我もくといぢり散せしが名に負ふ大部の百七卷容易な者では出来ざれば皆途中にて立消し残るは客の手許の端本是計りでは詮方がないと只嘆声を聞のみなりしが單り南鍋町の兎屋では全部を一時に出版し仁義礼智の四冊に分ち桐の箱入で売出しましたが西村先生の批評はあり三浦先生の校合は能し紙も仕立も上等で挿画活字も至極鮮明中々な好本です」

\* 11月28日 「雜報」 「出版 絵本真田三代記の第四編は京橋区加賀町の成文社より牡丹燈籠の第十、十一の兩編は東京稗史出版社より何れも出版せり」

11月29、30日 「日本国あるを知れ 愛梅」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 11月30日 「雜報」 「井上参議の一行新聞社を訪ふ 同行には山口県下巡視の途次去る十七日防長新聞社へも立寄られ編輯印刷部等夫々一覽ありし由如何なる御用向のありたる哉は知らざれど参議の新聞社を訪はれしは最と耳新らしき話しなり又同参議には来月九日迄に同県下の巡視を畢へ岩国より直に帰京の途に就る、由と自由新聞に見ゆ」

「黒主の後胤祖先の名譽を回復せんとす 世に六歌仙と称する中の一人大伴の黒主朝臣は有名なる歌人にて



人丸赤人等と共に古今の序にも批評されたる如き紳士なるにも抱らず近頃の狂言作者が作し常磐津淨瑠理「積恋雪関扉」といふ院本には黒主を悪人に作り出し「天下を望む大伴の黒主」など、穩かならぬ詞を出させ芝居でも立敵の役とは成行しが目下大和国葛城郡葛城村に住む大伴丹下といふ人は正しく朝臣の後裔なれば祖先の行状玉石位置を代しを大いに嘆き其後裔たる身を以ていかで黙止してをらる可きか右様な不都合ある廉々は一切抹殺に附しました此技をする者にも此等の事のなき様御禁止ありたしと親戚相謀りて其筋へ願ひ出しと」

11月30日～12月4日 「山田勝弥の履歴」全四回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

\* 12月2日 「雑報」 「成島柳北翁死す 朝野新聞社の成島柳北翁は頃日肺病に罹り療養中の処薬石効なく去三十日の午前十一時頃死去せられ明三日午後一時出棺にて本所押上村の本法寺に於て葬儀を行はるゝ由悼むべき事どもなり」

12月3～7日 「一利一害 利害生 稿」全三回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

12月4、5日 「再度の奇運」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

\* 12月4日 「雑報」 「錦絵 先頃由井が浜敷皮の場を描て大喝采を蒙りし当社の画工芳宗は又ぞる版元琴平町本阿弥の需に應じ此度は祐成時致が飯屋へ忍び入る所ろの図を三枚つゞきに認め彫刻とも極念入の上伊東祐親の正統（だか如何だか）伊東専三氏の書入さへ有て中々の上出来なれば相変らず御高評を希ふ」

\* 12月7日 「雑報」 「小説籌本 故広瀬貞恒氏の遺著なる小説籌本と云る面白き小説を本所緑町の赤坂亀次郎方より出版したるが中々面白き様に覚ゆ」

「かるた 横山町の絵草紙地本問屋辻文方より狂句に寄たる新工夫のいろはかるた并に西洋のかるたを童蒙

衆にも解りやすきやう極手輕に拵へて発兌たり初春の御進物杯には至極宜しい」

12月7～10日 「石狩報告」全三回 \* 雜報欄にかぶせ見出しで連載。

12月9～28日 「英国議院の弊を論ず」全九回 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。23日から「英国議院を論ず」と改題される。

\* 12月9日 「雜報」 「三浦義方氏死す 第日本書林の親玉鬼屋誠氏の番頭兼今度同店より出版したる南総里見八犬伝の校正者なるいろは新聞の旧記者三浦義方氏は先頃より病氣中の処ろ一昨七日愛宕下の病院にて遂に死去されたり」

\* 12月10日 「広告」 「東京裨史出版社広告／弊社予約書籍出版の期限を誤り深く謝し奉り候扱て私儀過般弊社を譲受け爾来社業を挽回し以て従來の恩顧に報ひ奉らんと欲し此程漸く事務整頓致候就ては八犬伝を始め其他総て予約書籍は来十八年二月を期し誓て全備せしめ候間冀くは此段御承知の上益々御愛顧下され度候也／東京裨史出版社々主 久保田清造」

\* 12月11日 「雜報」 「大勉強大奮発 一度時事新報が先鞭を着しより我もくと競争を始め東京日々新聞は今一層大勉強大奮発にて来る十八年一月一日より十二月三十一日まで一年三百六十余日大祭日でも日曜日でも一向頓着なく一日も休刊まず発兌する由尤も日々新聞の名あれば最とも千万また東京横浜毎日新聞はいよく来年より日曜日の外一切休刊せざる旨を昨日其筋へ届け出たり」

12月11、12日 「塵紙三千円たゞ捨てた」 \* 雜報欄にかぶせ見出し。

\* 12月12日 「雜報」 「舞踏会 鹿鳴館内へ設けられし舞踏会は追々盛大に赴き昨今は已に會員四十名程に至りしを以て是まで毎月曜日を其稽古と定められしを自今は月金の両曜日と改められし由」

「貞操婦女八賢誌 日本小説中の巨擘と呼ばれたる大部の八犬伝を一時に出版したる大腹中の書肆南鍋町の兎屋にては予て広告せし如く馬琴の八犬伝に引続き初代為永春水の著作せる貞操婦女八賢誌と題せる小説を同じく合巻一冊に纏めて出版せり例ながらの美本でゐる」

12月13日～1月4日 「布哇移住」全九回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。14日から「布哇事情」と改題される。

\* 12月17日 「雑報」 「にしきゑ 天保水滸伝の内霧太郎大田原に於て勢力を救ふの図は芳年の筆にて長谷川町の武田平治方より出版になりしが三枚続の上等錦画また興<sup>こうてみなんし</sup>伝<sup>ママ</sup>美南誌（の初集が京橋区柳町三番地の松寿堂より発兌になりたり」

「続文法詳論 石川鴻斎翁著述の続文法詳論（前後二冊）は例の鳳文館より出版此書は文法を詳細に論述せられたる有用の良書なれば曩に同館より出版の正篇と並読せられなば裨益定めて多からん」

12月20、21日 「改進黨の總理大隈氏及び河野前嶋北畠の三氏脱党す 有耶無耶生」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

12月20、21日 「井上角太郎氏の直話」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。題名は21日による。朝鮮からの帰朝者による事変の報告。

12月23日～1月11日 「星亨氏公判傍聴筆記」全一二回 \* 雑報欄にかぶせ見出しで連載。

\* 12月24日 「雑報」 「小室信介様 自由燈の記者小室信介様は一昨日外務省准判任御用掛（月俸四十円）を命ぜられ井上外務卿に随行して昨日朝鮮へ赴かる」

「停刊百日 京都の自由魁新聞は発行停止を命ぜられ殆ど百日（去る廿一日にて満百日）に及ぶも未だ解停の命なきゆゑ同新聞は去る十七日に廃刊を届出て更に翌十八日同新聞社の場所に於て京都新報と称する画

入傍訓の新聞紙発兌を出願せしと」

12月26、29日 「情死論」 \* 「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

\* 12月26日 「雑報」 「日報社と忠愛社 東京日々新聞は来年の一月一日より一年三百六十五日一日も休刊せず新聞紙を発行且つ毎日、新聞紙を甲乙二種に分ち朝夕二度に発兌する由また明治日報は矢鱈に新紙を増刊なすも自然杜撰に流るゝの恐あるを以て大祭日并に月曜日の此迄の通休刊其代り休刊日の代価を引去り月極五十銭と直下したり」

「東京絵入新聞 同新聞社にては来る二十九日より京橋区尾張町二丁目へ移転り且つ来一月四日より紙面も改良し一層勉強さるゝとの事なり」

「西洋いろはかるた 南伝馬町三丁目の絵草紙店松盛堂より出版したる題号のかるたは西洋の俚諺を我国のいろは骨牌に摸して拵らへたる新工夫の物ゆゑ一段面白き趣向なり」

\* 12月28日 「雑報」 「大隈重信様 今度大隈重信様が改進黨を脱からくりされたる内幕の機関なりと京童の言ひ囃す処を聞て見ると毎月（一千円ぎづ、三菱会社長の岩崎様より一千円づゝ送られ居たところ如何なる都合ありてか此程より右の送付金お廃止となり大隈様の財政至極面白からず折しも或る人が再たび官海へ泳ぎ出しては如何だとの話ありしを以て儲こそ脱党されたるなりと」

「花王木草紙 弊紙の続話にて頗ぶる喝采を得たる花王木草紙を例の出版社より絵入美本に仕立て初春の新版として本日より発兌たれば沢山御購求を願ひあげます」

「提灯持 滑稽立志編（全一冊）は小石川指ヶ谷町の瓜生政和方より絵入平仮名附朝鮮戦記（全一冊）は日本橋銀町の開成社より馬術独稽古及び神仙年齢の当物と云ふ面白きものは団々社より絵本真田三代記の第

十二、十三の両編は例の成文社より出版」

12月28日、1月6日「縁は異なるもの訝あぢなもの」 \* 雑報欄にかぶせ見出し。

\* 12月29日「絵入自由新聞」「告白 長い様で短かい明治十七年の光陰も最早二三日にて尽き果て又々明治十八年の新天地を迎へる支度と暮の混雑看客諸君も嘸御多事と推察奉まつり候偕当新聞儀本日は月曜の休刊日に候ところ社会多事の折から殊の外種沢山に候まゝ一日お負に此官令附録付の新聞を発兌し本年中の種を総浚しよといたし明日より来一月三日まで例に依て休刊翌四日は一年半中の御便利御重宝なる附録を添へ花々しく初刷の新紙を発兌し尚ほ来春よりは政治に關係りたる西洋小説の勇壮活発なる至極面白き続物を掲載いたし社員一同勉強の臍はらを固め一層お目先を換へ御覧に入れ候間此上とも御愛看の程偏に願ひあげ奉まつり候但し休刊中と雖ども朝鮮事件は勿論至急を要する事項之あり候節は号外附録を発兌し直に御報道仕まつるべく候先是年末の御礼伺がひ旁々其為め稿條かくの通り 社員一同再拝」附録に「火薬取締規則、爆破物取締罰則」を掲載。